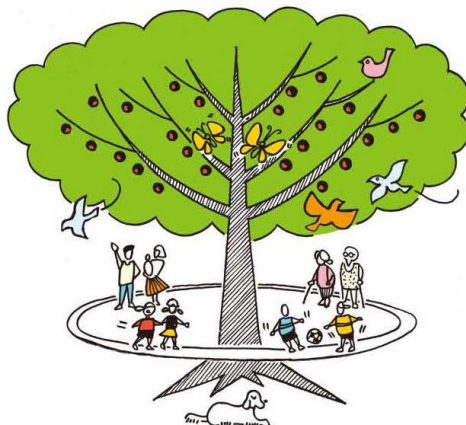


福島・米沢ワークショップ 報告書

自由なくらし。自分らしく、ともに住まう。

—東北に高齢者グループリビングの暮らしを—



高齢者グループリビングは、パッケージ化された暮らしのシステムを購入する仕組みではなく、みずから暮らしをつくる楽しみと自由が（時には苦労も）含まれる居住スタイルです。

独居高齢者の孤立を防ぎ、生活の質を上げ、地域との繋がりを促進するためには高齢者グループリビングという住まい方が有効と考え、私たちがこれまでグループリビングの運営を通して蓄積してきた経験や知見を、復興住宅や新しくできるサービス付き高齢者向け住宅に提案するとともに、地域住民、行政にこのような住まいの選択肢があることを知っていただくために、ワークショップを開催しました。

主催 社会福祉法人福島福祉会

共催 NPO 法人結いのき、NPO 法人いぶりたすけ愛、NPO 法人暮らしネット・えん、
NPO 法人 COCO 湘南、NPO 法人てのひら

後援 グループリビング運営協議会、慶應義塾大学 SFC 研究所地域協働・ラボ

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

目次

福島ワークショップ.....	1
講演 1 「『自由な暮らし。自分らしく、ともに住もう。』の仕組み」	1
講演 2 「てのひらの暮らし」	10
講演 3 「東日本大震災からのメッセージ」	17
ワークショップ	22
米沢ワークショップ.....	33
講演 1 「わたしはどう生きたいのか」から始まる住まい.....	33
講演 2 「地域に根ざしたグループリビング」	40
講演 3 「生協活動とグループリビング」	46
ワークショップ	50

■□■ 福島ワークショップ 2014年11月15日(土) ■□■

講演1 『自由な暮らし。自分らしく、ともに住もう。』の仕組み

慶應義塾大学 SFC 研究所 上席所員(訪問) 土井原奈津江氏

自由で自分らしくという居住者のニーズを実現するために、仲間との関係や運営者の役割について考えます。

COCO 湘南台をベースにしてできたグループリビングの中で、最も高齢化が進んでおり、「自立と共生」の意味を考えるのに適した、登別の「たすけ愛の家」の居住者のインタビューをもとに考察します。

たすけ愛の家は COCO 湘南台をベースにしてできたグループリビングの中で、居住者の平均年齢が最も高いところです。しかし地域で自由に自分らしく生活することができており、「自立と共生」の意味を考えるのに適しているため、ここを選びました。60代、70代の若い居住者は積極的に地域に出ていくこともできますが、加齢し、心身状態が衰えていく中で、居住者自身、運営者それぞれが「自立と共生」をどのように実現していけばいいのかについて、考察したいと思います。

今日はグループリビングをご存じでない方もいらっしゃると思いますので、まず最初にグループリビングの定義を簡単にご説明します。グループリビングといっても様々なタイプがありますが、今回のワークショップの開催地はいずれも JKA の補助で建設されおり COCO 湘南台をベースに作られているので、COCO 湘南台型のグループリビングの定義を述べます。定義は「複数の住戸(または居室)と共同生活空間から構成される住宅において、コミュニティの中の様々な資源による食事・清掃・健康維持等に関する基礎的生活サービスを受けながら、高齢者が安心して自立した暮らしを目指す住まい方」です。

左下に空間構成を示しています。空間は共用部分と専用部分に分かれます。専用部分には居間・食堂、厨房、浴室、洗濯室、アトリエがあります。このアトリエは西條節子さんがグループリビングを作るときにこだわった部分で地域交流スペースを指します。また専用部分は居室です。

本日の発表内容

「自由な暮らし、自分らしく、ともに住もう。」

自由で自分らしくという居住者のニーズを実現するために、仲間との関係や運営者の役割について考えます。


COCO湘南台をベースにしてできたグループリビングの中で、最も高齢化が進んでおり、「自立と共生」の意味を考えるのに適した、登別の「たすけ愛の家」の居住者のインタビューをもとに考察します。

2

グループリビングの定義

「複数の住戸(または居室)と共同生活空間から構成される住宅において、コミュニティの中の様々な資源による食事・清掃・健康維持等に関する基礎的生活サービスを受けながら、高齢者が安心して自立した暮らしを目指す住まい方」

3

NPO法人いぶりたすけ愛	たすけあい活動
 <p>法人の活動内容</p> <p>優サービス</p> <ul style="list-style-type: none"> 指定居宅訪問介護事業 指定居宅支援事業 福祉有償運送 <p>たすけあい事業</p> <ul style="list-style-type: none"> 在宅サービス サロン（地域交流） 配食 グループリビング ともかな（地域交流スペース等） <p>1995年 「登別ライフケアを考える会」設立（在宅介護） 1999年 NPO法人「いぶりたすけ愛」設立 2000年 介護保険事業「優サービス」開始 2006年 グループリビング「たすけ愛の家」開設 2011年 「ともかな」開設</p>	<p>たすけあい活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 入会し正会員、または運営会員になるとサービスを受けることも提供することもできる。 入会金 正会員 1万円 運営会員1.5万円 サービスはチケット制 サービスを提供した人は受け取ったサービス券を現金に清算できる。 1時間 6点（1点100円） <p>福祉サービスの活動というと、提供者とその利用者に分かれがちですが、うちの団体は相方向性の会員です。会員それぞれが、自分たちでできることでお互いに助け合うという会です。</p> <p>2013年度 正会員 835人 運営会員 46人</p>

ここでとりあげるたすけ愛の家はNPO法人いぶりたすけ愛の運営です。いぶりたすけ愛について、簡単に概要をお話しします。設立の経緯は理事長の星川さんが社協に勤めていた時の仲間と一緒に1995年に「登別ライフケアを考える会」を設立し、地域でのたすけ愛活動を始めたのが契機となり、2000年から介護保険事業を始め、2006年にJKA補助でたすけ愛の家を立ち上げ、2011年には、ともかなという地域交流スペースを開設しています。たすけ愛活動は、会員制になっています。会員それぞれが、自分たちでできることをお互いに助けあう会です。このような考え方に同意し、集まった居住者やスタッフは共同性の醸成が比較的容易で、フラットな関係を保ちやすいのではないかと思います。

2013年度の正会員数は835人、運営会員46人です。

たすけ愛の家の居住者をインタビューしたのは2011年でした。当時、平均年齢86歳、80代以上が大半を占め、90歳が3人というJKA補助でできたグループリビングの中で最も高齢化していました。介護状態は要介護3人、要支援6人でした。

介護保険サービスの購入については居住者が自由に選択できるようになっています。ホームヘルプサービスはほとんどの方がいぶりたすけ愛の介護サービスを購入されていました。デイサービスについてはいぶりたすけ愛はもっていないので、居住者は地域のデイサービスを自由に選択されていました。

いぶりたすけ愛の居住者にインタビューをした中から、それらの声をピックアップをして、ご紹介しながらグループリビングのことを考えていきたいと思います。

居住者のニーズについての発言を4つのカテゴリーにまとめた。そのニーズに運営者がどのように対応しているかも同時に観察して、その対応の仕方をまとめています。

まず最初の居住者ニーズは自発性です。声としては

「退院後ヘルパーを頼んだが、しばらくしてやめた。何かしないと生きているという感じがしない。(93歳女性)」、

「自分でできることは自分でしたい。人任せにして寝そべっていたのではボケてしまう。(89歳男性)」、

居住者ニーズ(1)：自発性	居住者ニーズ(2)：楽しく美味しい食事
<p>退院後ヘルパーを頼んだが、しばらくしてやめた。 何かしないと生きているという感覚がしない。(93歳女性)</p>	<p>食事作りの負担から解放された。一人暮らしの食事はいい かげんだった。ここは栄養が考えられている。(83歳 女性)</p>
<p>自分でできることは自分でしたい。人任せにして寝そべて いたのではボケてしまう。(89歳男性)</p>	<p>みんなで話をしながら食べたら、さらに美味しく感じた。 (87歳 男性)</p>
<p>ここのいいところは出入りの制限がないので行きたいところ に自由に行ける。(74歳 女性)</p>	<p>何が食べたいですかと聞いてくれ、食事を作ってくれる。 主婦がつくる家庭的な料理が嬉しい。(93歳 女性)</p>
<p>1.自発性を活かす「ともに住まう」姿を探し、試み、 良いものを持続させる</p>	<p>2.共生のベースとなる家庭的な食事とコミュニ ケーションを大切にす</p>

「ここのいいところは出入りの制限がないので行きたいところに自由に行ける。(74歳 女性)」という意見がありました。

運営者側は、自由や自発性を活かす「ともに住まうという姿を探索し試みて、いいものを持続するという体制がありました。

次にこのグループリビングの生活をベースで支えているのは、楽しく美味しい食事です。ここでは3つの声を紹介します。

「食事作りの負担から開放された。一人暮らしの食事はいいかげんだった。ここは栄養が考えられている。(83歳 女性)」、

「みんなで話をしながら食べたら、さらに美味しく感じた。(87歳 男性)」、

「何が食べたいですかと聞いてくれ、食事を作ってくれる。主婦がつくる家庭的料理が嬉しい。(93歳 女性)」

こういう風に共生の一番ベースになる家庭的な食事とコミュニケーションを大切にすることで運営者は対応していました。

3番目は居住者間の緩やかな関係をまとめました。居住者の声は

「居住者との関係は「つかず離れず」が一番大切。親しすぎず、冷たくなならないようにさりげなく。(93歳女性)」、


「それぞれの過去を生きてきたので、考えることは違う。自分の物差しで相手をはかっているはいけない。(93歳女性)」

「ミーティングで、話をすることでお互いに何を考えているかがわかるのでいいと思う。(87歳男性)」

居住者ニーズ(3)：居住者間の緩やかな関係
<p>居住者との関係は「つかず離れず」が一番大切。親し すぎず、冷たくなならないようにさりげなく。(93歳女性)</p>
<p>それぞれの過去を生きてきたので、考えることは違う。 自分の物差しで相手をはかっているはいけない。(93歳女性)</p>
<p>ミーティングで、話をすることでお互いに何を考えているか がわかるのでいいと思う。(87歳男性)</p>
<p>3.緩やかな関係を持続するために、居住者間の 関係が固定されず、開かれている状態をつくる</p>
<p>4.様々なコミュニケーションの場をつくる</p>

これに対して運営者側は、緩やかな関係を維持するために、居住者間の関係が固定されず、開かれている状態をつくることを心がけている事が見て取れました。

また様々なコミュニケーションの場をつくるということをごろみしていました。これについては最後に地域の関係の中で述べますが、居住者間だけではなく、外の人も入ったコミュニケーションの場を作られていました。

ミーティングの様子	居住者ニーズ(4)：共生と役割
	<p>このような共同生活は押し付けられるのではなく自分達で考えて生活することが大切だと思う。(89歳男性)</p> <p>助け合いの仲間だから私たちを助けてくれる。私たちも同じようにやっている。(93歳女性)</p> <p>上から管理され、世話されるのとは違う。自分も勝手なわがままは言わず、協力していこうと思っている。(93歳女性)</p> <p>役割はあった方がいい。責任ができるので張りが出る。90代の人も役割を持って元気になっている。(83歳 女性)</p> <p>5.共生していくために役割を持つことが大切であり、役割を一緒に考え、作る調整役が必要</p>

この写真はミーティング時のものです。

ミーティングは週 1 回行われており、これほど頻繁に行われているところは他のグループリビングにはありませんでした。

4 番目は共生と役割ということです。声としては

「このような共同生活は押し付けられるのではなく、自分達で考えて生活することが大切だと思う。(89歳男性)」

「助け合いの仲間だから私たちを助けてくれる。私たちも同じようにやっている。(93歳女性)」

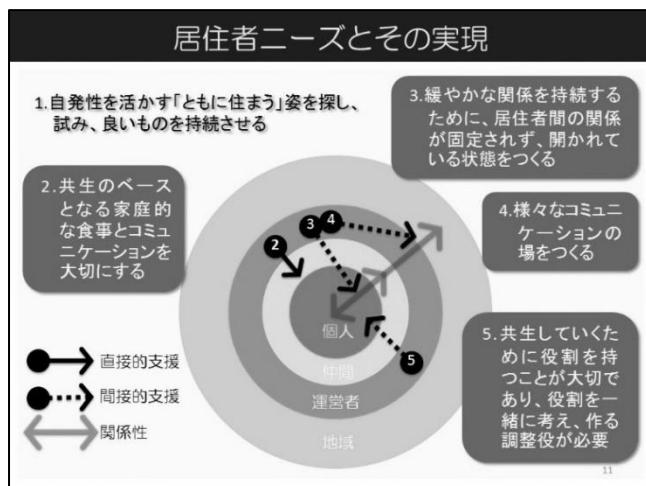
「役割はあった方がいい。責任ができるので張りが出る。90代の人も役割を持って元気になっている。(83歳 女性)」

運営者側としては、共生というものを作るために役割を持つことが大切だと考えていて、一方的に与えるのではなく、自然と役割を持てるようにしているという事だと思います。そしてその役割をスタッフの方がやっています。

以上のことを図にまとめました。

この図の中心は居住者個人、それを取り巻くところに仲間と書いていますがこれは他の居住者です。その周りは運営者、さらに地域を表しています。まず最初に挙げた「自発性を活かす「ともに住まう」姿を探し、試み、良いものを持続させる」ことはここでの生活全体を通して行われています。

2 番目として運営者が居住者に対して「共生のベースとなる家庭的な食事とコミュニケーションを大切にする」です。



3 番目に個人と仲間の関係ですが、「緩やかな関係を持続するために、居住者間の関係が固定されず、開かれている状態をつくる」と言うふうに運営者側が直接介入するよりはそういう雰囲気が出てくるように心配りをしているということでしょうか。

4 番目は様々なコミュニケーションの場を作るという事で、居住者が地域の人と接するといことも含めて、コミ

地域との繋がりが大切
「自立と共生」を実現するには、グループリビングの居住者である以上に、地域住民の一人であることが重要
グループリビングだけだと毎日同じ人だけ、ここはサロンがあるので、外部の人が来るからいい。(83歳 女性)
昔から通っている俳句教室やデイサービスに、毎週通う。出かける前日は、緊張感で、気が引き締まる。(87歳 女性)
サロンは教室の種類が多い。俳句が勉強したいと言ったら、俳句教室をつくってくれた。サロンは強制的ではないので好きな時間が過ごせる。(93歳 男性)
居住者全員が駄菓子屋の出資者になり、みんなで応援している。(89歳 男性)

コミュニケーションする場を作っているという事ですがこれについては後にもう一度説明します。

5番目として、共生するために役割を持つことが大切でその役割を一緒に考える。という事で、運営者が個々人の役割に気を配って、それをさりげなく作っていくことです。

地域での関係が一番大切だと、ここでのインタビューで感じたので、それをまとめました。

「自立と共生」を実現するには、グループリビングの居住者である以上に、地域住民の一人であることが重要だという風に考えました。

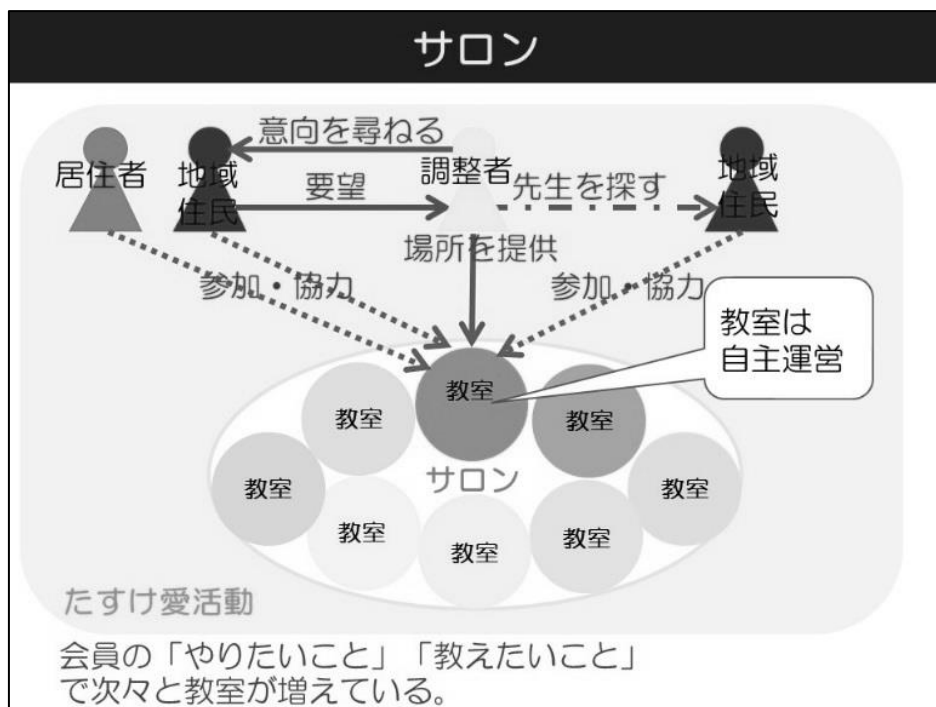
声としては、「グループリビングだけだと毎日同じ人だけ、ここはサロンがあるので、外部の人が来るからいい。(83歳 女性)」

「昔から通っている俳句教室やデイサービスに、毎週通う。出かける前日は、緊張感で、気が引き締まる。(87歳 女性)」

「サロンは教室の種類が多い。俳句が勉強したいと言ったら、俳句教室をつくってくれた。サロンは強制的ではないので好きな時間が過ごせる。(93歳 男性)」

「居住者全員が駄菓子屋の出資者になり、みんなで応援している。(89歳 男性)」共同性の促進する活動を作り上げる

こういう風に地域の一員として生きることによってグループリビングに住む人たちが住まいの中で完結するのではなく一人一人が自分らしく住むことが出来ているという事が言えると思います。



サロン（俳句教室）



サロン（体操教室）



たすけ愛の家の活動の特徴的なものの 1 つに、サロンがあります。たすけ愛活動の中でサロンはグループリビングが出来る前から、行われていました。

現在はグループリビングと同じ建物に併設されています。

サロンはたすけ愛の会員になると利用でき、2013年度は年間 2016 人の利用がありました。

たすけ愛の調整者が居住者や地域住民のやりたいことを聞き、地域から先生を探して来て教室を作っています。

生徒と先生をマッチングし、サロンの場所を無料で提供します。

そして先生と生徒が一緒になって自主運営になっていて、地域の自発性を促進するような形で行われています。

多様な趣味の教室が今も増えつつあり、現在月曜日から金曜日までサロンはフル稼働しています。

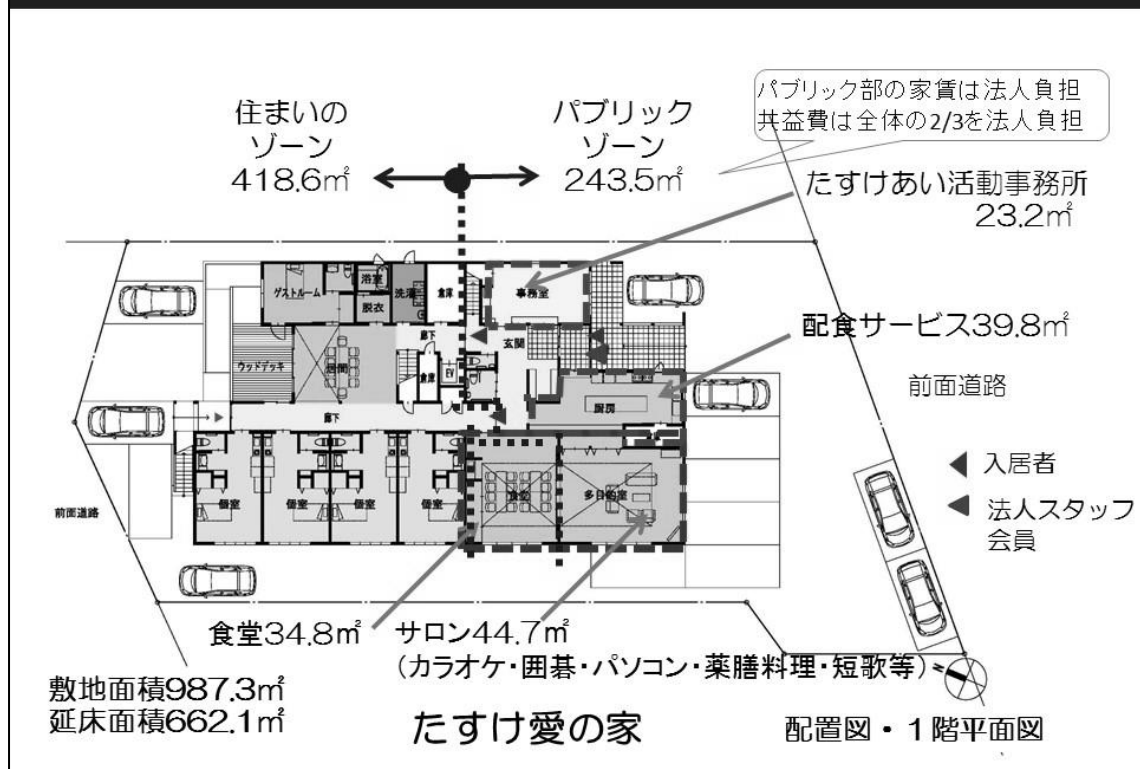
そこでは居住者ととも地域住民、スタッフも一緒に楽しんでいます。

余談ですが俳句の教室は居住者の要望で作られました。要望を出した居住者はおーいお茶の俳句コンクールで特別賞を受賞されました。昨年、病院のベッドで 2 回目の受賞の報告を聞き、翌日亡くなられたそうです。96 歳でした。亡くなる直前まで熱心に俳句の勉強をされていたそうです。この居住者から刺激を受けて俳句教室は大変人気だそうです。また教えていた俳句の先生はグループリビングに入居されたそうです。

これは俳句教室の写真です。皆さん熱心に取り組まれています。高齢な方の参加が多く、耳の遠い方もいらっしゃるため、記録係がいて、教室での記録をとり、居住者に渡されていました。

この写真は 95 歳の先生が教えている体操教室です。これもまたサロンの人気の教室の 1 つでした。

たすけ愛の家 1階平面図



赤の点線で囲ったところがサロンとして使われています。右側が多目的室で、左側が食堂です。この食堂は普段居住者が夕食時に利用しているものですが、日中のサロンの時間は間仕切りを開け、解放されサロンに使われています。

次にグループリビングの隣にある地域交流スペース「ともかな」についてお話しします。ともかなのコンセプトは子育てをメインに高齢者と障害者が社会企業家になって地域を変える、です。

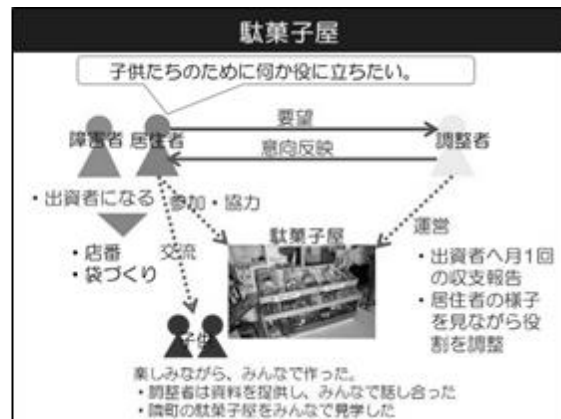
地域で子供を育てるためには直接会う機会がないと難しい。子供に会いに行きたいと思った時に子供と話ができるような環境をつくりました。ともかなには、コミュニティカフェや子育てサロンものづくり工房などの多世代の交流場所があります。

ともかなの駄菓子屋について、説明します。駄菓子屋は居住者の「子供のために何かしたい」という声を受け、調整者が考え提案し意向反映して作られました。

調整者は駄菓子屋を作るにあたり、資料を用意し、それをもとに居住者と話し合い、隣町の駄菓子屋へ見学に行ったりし、楽しみながらみんなで作りました。

居住者や地域の障碍者が出資者となりました。たすけあい事業が運営を行い、居住者は店番やお菓子を入れる袋づくりをして協力しています。子供との交流もできるようになりました。調整者は出資者への月1回の収支報告をミーティングの際行っています。

一方的に押し付けるのではなくみんなが参加できる楽しい環境を整えていくことが大事だと思いました。



「ともに住まう」ということについて、まとめますと、10人という小規模のグループリビングは、居住者の加齢に伴う身体的・精神的変化の影響を受けやすく、居住者の入れ替わりによる関係性の変化も避けられません。居住者がグループリビングの中の関係性（居住者同士、居住者と運営者）が大きな割合を占める中で暮らしていると、こうした影響を受けやすく、生活が不安定化するおそれがあります。居住者は地域住民の一人として多様な関係性の中で暮らし、運営者も地域住民の一人としてサポートしていく姿勢が必要です。こうした不安定性を少なくし、安心した生活が営めるということ、つまり「ともに住まう」ということは10人がともに住まうというのではなく地域の中で一員として住まうというのが「ともに住まう」という事だと思えます。

自由な暮らし。自分らしく、ともに住まうをまとめますと、居住者は自分で考え、意向を伝える姿勢、運営への理解と協力、地域への積極的な参加が必要ですし、運営者は意向を受け止める環境づくり、意向を反映する体制、地域と繋がることを促進、支援が求められます。

フラットな関係の中で、運営者は居住者に対してより多くの自由を発揮できる環境を提供し、居住者は運営者に対して、自由が確保できるように責任ある行動をしていくという事で、いい関係ができているということです。

「自立と共生」はいろいろな定義がありますが、ここでの「自立」は自分の意向を伝えることや他者を理解すること、「共生」は住まいや地域の中で仲間意識を持ち、協力することと考えることができます。

またこの「自立と共生」は居住者だけではなく運営者にとっても必要な事だと考えました。

「ともに住まう」ということ

- 10人という小規模のグループリビングは、居住者の加齢に伴う身体的・精神的変化の影響を受けやすく、居住者の入れ替わりによる関係性の変化も避けられない
- 居住者がグループリビングの中の関係性(居住者同士、居住者と運営者)が大きな割合を占める中で暮らしていると、こうした影響を受けやすく、生活が不安定化するおそれがある
- 居住者は地域住民の一人として多様な関係性の中で暮らし、運営者も地域住民の一人としてサポートしていく姿勢が必要である

「自由な暮らし。自分らしく、ともに住まう」ということ

居住者
自分で考え、意向を伝える姿勢
運営への理解と協力
地域への積極的な参加

運営者
意向を受け止める環境づくり
意向を反映する体制
地域と繋がることを促進、支援

責任
フラットな関係
自由

「自立」
自分の意向を伝えることや他者を理解すること
「共生」
住まいや地域の中で仲間意識を持ち、協力すること

今回の発表は、地域の一人として生きることが大切ということをお伝えしたかったので、あえてケアの話に触れませんでした。しかし皆さんの中に介護が必要になった場合、自立や共生ができるのか、と思った方も多いと思います。そのことに対して最後にお話ししたいと思います。いぶりたすけ愛は介護に対しても、たいへん良い支援をしてくれています。居住者が自立できるように、必要なところをケアをされています。一方的なケアではなく、隙間を埋めるケアというのでしょうか。多すぎず、少なすぎず、足りないところに手を差し伸べるようなケアです。これができるのは少人数であることやフラットな関係性が影響していると思います。また運営については、ケアの量が多くなった場合はたすけ愛の会員に声をかけ、手伝ってもらい、必要がなくなったら頼むのをやめるという自由な雇用形態も、このような支援を可能にしていると思います。さらに、フラットな関係性を作ろうとする姿勢と自立を支えることができる介護知識を持った調整者がいることは、居住者が、介護が必要になっても、自由に暮らせることの大きな鍵となると思います。

以上で発表を終わります。

ご清聴ありがとうございました。

講演 2 「てのひらの暮らし」

NPO 法人 てのひら 理事長 石原智秋

NPO法人てのひらのボランティア歴

平成4年ーボランティアグループてのひらとして社会福祉協議会のボランティアセンターに登録

- ・親子ふれあい教室ー稲作り、芋ほり、餅つき、等々、障害児との交流を図る
- ・100円募金活動ーインドネシアの山奥に学生の寮を作ろう

平成7年

- ・震災ボランティアー阪神淡路大震災後仮設住宅での支援活動
- ・介護福祉勉強会の開催ー地域の住民

平成11年ーNPO法人格取得

平成12年ー介護保険事業開所

平成16年ー高齢期の新しい住まいを考える会(グループリビング建設のきっかけとなる)

平成20年ー **COCO湘南台見学→住まい方に共感→JKAに補助金申請**

↓2回

平成21年 補助金決定 建築

平成22年4月 開設

兵庫県と福島県ー阪神淡路大震災と東日本大震災と言う不幸な共通点

↓
迅速な動き **ボランティア←災害ボランティアとして参加 (ボランティア元年)**

婦人会

医療関係

その他ー暴力団の山口組などは次の日から備蓄の食糧を提供
炊き出しを始めた これは報道されなかった

↓
仮設住宅の建設 加古川市、高砂市←相談員、ボランティア

コレクティブハウスの設置 (県営、市営)ー高齢者の孤独死の防止

↑ ボランティアを含めてサポーター、アドバイザーの配置

高齢者がひとりで生活することの不安への解消

**ボランティアとして仮設住宅に関わり、こうしたことを見聞きしてきたことが
きっかけとなって、高齢期の新しい住まいについて考える会が発足した**

こんにちは、兵庫県からまいりました石原でございます。

レジュメの方にてのひらの理念や運営方針を書かせていただいておりますので、今日はそこはカットさせていただきます。

さて、この福島県と兵庫県は東日本大震災と西日本大震災と言う不幸な共通点があります。同じがれきの山でありましたが、大きな違いは、東日本大震災は原子力の後遺症を残してしまったところにあります。来年の1月で震災後20年になる兵庫県ではすっかりと復興が終わっておりますが、東日本大震災は、自然災害の上に原子力という人災が乗っかりました。ですから、こちらに來させていただくにあたり、非常に暗いイメージを抱いておりましたが、復興に向けて、今ある中で懸命に希望をもって働かれておられる方々の姿に感銘をうけております。

さて、てのひらは平成4年にボランティアグループとして社会福祉協議会に登録し、介護勉強会など、さまざまなボランティア活動に携わってまいりました。平成11年にNPO法人を取得し、介護保険事業所を運営しながら、並行してボランティア活動をしておりました。そのひとつに高齢期の新しい住まいを考える勉強会があり、それがグループリビングを立ち上げるに至った経緯です。



高砂市は播磨臨海工業地帯の中心にあたります。震災のあった神戸市と世界遺産の白鷺城がある姫路市のちょうど真ん中にあたります。瀬戸内海に面しています。朝日が昇って来る写真は3階建ての屋上から撮ったものですが、すぐ横に河口があり、とても環境によいところですよ。

土地面積が狭いので、3階建てにしましたが、大規模なマンションと違い、小規模なグループリビングはどんな小さな土地にでも建てられるということを皆様にも知っていただきたいと思いました。小さい土地を大きく使うことで、非常に便利な立地条件の場所に建てることができます。てのひらは8室。そのうちの1室を共用ルームとし、後の7人の住まいということになります。

私ども、てのひらの特徴というのは、先ほど土井原様がおっしゃったように、自由なことですよ。1日中、みなさま、自由に過ごされております。朝、屋上に上がって体操をされる方、河川敷を散歩される方、デイサービスに行かれたり、仕事に行かれたりと、わずか7人ですのに、みなさん好きに過ごしておられます。2階、3階が居室です。1階は昼間はミニデイサービス、夜は居間になっておまして、昼間はこのデイサービスの利用者の方々と居住者がコラボしながら楽しんでおられます。昼間、部屋で過ごされる方はいらっしゃいません。

入居者の構成は、自立の方が1名、要支援Ⅰ-2名、要支援Ⅱ-2名、要介護Ⅰ-1名、要介護Ⅱ-1名の合計7名です。



食事は、夜、昼と提供しておりますが、もちろん希望者です。お昼は3人の方が1階でデイサービスの方々と一緒に食べられます。夜は、自立の方が中心となって、みなさん揃って食べられます。時間は55分と決められていて、5時55分にみなさん1階に降りて来られます。食事は法人が用意し、自立のMさんが後片付けまでしていただきます。コピーしてきたものがあるのですが、Mさんが毎日、その日の雑談の様子とか、こんなことがありましたと言うことを、走り書きですが、書いていただきます。

次の写真は、毎日の食事の一つです。

次の写真は、毎日の食事の一つです。



もう一枚は、Mさんが地域の方々と一緒に小物作りをされているところです。平日はデイサービス。土、日は地域や家族の方に開放しております。作った小物は年に一度、隣接した社会福祉協議会が開催する社協フェアでバザーに出し、その一部は赤い羽根募金に寄付いたしております。

次の写真は、屋上で、プランターでの野菜作りです。ほうれん草とかブロッコリーとかいろいろ作っておられます。



もう一枚の写真は、デイサービスの方々に交じって将棋をされているところです。男性2人が毎日、ボランティアでデイの利用者の男性と将棋や囲碁をして下さいますが、結構自分たちも楽しまれています。デイの時間が終わって利用者の方々が帰られた後も、残って、将棋の勉強をしておられます。

それから、先ほど映りました食事なんですが、「NPO 法人てのひら (高砂市)」をインターネットで検索してみてください。毎日のお昼の食

事が出てきます。是非ご覧ください。

写真を見ていただきましたように、みなさん、毎日毎日を非常に楽しみに暮らしておら

れます。地域から離れる事なく、地域の中で、好きなことに参加しながら生活を楽しんでおられます。要介護Ⅰ、Ⅱの方はデイサービスを利用されておられますが、これも自由、自分の意志で行きたい所に行かれます。2人とも、階下のデイサービスではなく、他のデイサービスを利用されていらっしゃる。自由ですから…ヘルパーを利用するのも、私どもの法人にはヘルパー事業所はなくて、外から来ていただいています。かかりつけ医もまたしかりです。法人の顧問としての医師はいらっしゃるのですが、この居住者の方々はそれぞれ別にかかりつけ医があります。すべて自由で、自分たちが自分自身で、またご家族と相談して決められることを基本にしております。

リビングの決まりごとは、夜の食事時間だけです。後は、食後にあれこれと出た意見や思いを、実はこんなことがありました、とかこんな意見が出ていますと言うことを書いて持ってきてくださいます。それについてお返事をすると言う形で、月に何回意見交換をすると言うことは決めておりません。問題があれば、必ず報告がある、それに対して返していくことにしています。

居住者は、地域の方すなわち、高砂市内の方が5名、隣接した加古川市の方が2名です。

去年、このようなグループワークを高砂市で開催したのですが、その時にもこのようにたくさんの方が参加してくださいました。その時以来、グループリビングのありようや、グループリビングの自由さと言うのを少しずつ分かって下さる方々が増えてきました。それまでは、グループリビングというのは施設だと思っておられた方が多かったのですが、最近は高齢者のワンルームマンションだと考えて下さるようになりました。高齢期の第3の住まいであり、元気な間に自分で決め、自分の意思で入居するのだと考えて下さるようになりました。

開設して1年目2年目の間は、なかなか入居される方がなかったんですけど、3年目になってやっと満室になりました。

ワークショップや見学会を開催するという働きかけのおかげで、この頃はけっこう見学に来て下さったり、入居を希望される方があったり、待機待ちといったこともできております。

これからちょうど私ども団塊の世代が高齢期に入ります。子供と一緒に住まない世代になってきています。グループリビングがこの地域に増えることで、元気な高齢者が地域を離れることなく、自立と共生を掲げて、安心して住み続けることができると願っています。

このようなワークショップを開催するという活動で、高齢者にとって安心安全な、そして自由な住まいが全国的に広がっていくことを願いながら、グループリビングを運営しています。

非常に簡単ではございますが、時間となりましたので、これで終わらせていただきます。何かご質問がありましたら…

「高齢者生き生きグループリビングでのひら」について

NPO法人でのひら

1. 運営方針

2. 検討経過

(1) 設置場所の選定について

【選定の理由】

小さい土地を大きく使うことで、私どもが目指している小規模のグループリビングがどこにでも建てられることを多くの高齢者の方々や事業所に知ってもらい必要があることを考慮にいれました。

(2) 設計について

① 生活しやすいバリアフリー

② 居室

8室のうち1室に浴室を設置し、入浴後はその部屋で寛ぐことにしました。最初は8人と考えていましたが、7人として、1室を共同で使うことにしました。

③ 1階にリビングを設けました。

④ 要介護となった時のことを想定し、相談室を配置しました。

⑤ 浴室の工夫

(3) 入居者数及びコーディネーター

3. 施設に関する事項

(1) ハード面

- ①入居者個室の面積と仕様
- ②バリアフリー仕様について
- ③防火構造、防災機器

(2) ソフト面

- ①日常生活支援
- ②病気時ホームドクター等地域医療機関との連携
- ③必要時介護サービス（ホームヘルプ等地域介護組織との連携）
- ④ターミナルケアについて
- ⑤介護保険、医療保険支援について
- ⑥その他

4. 現在の暮らし

入居者構成

年齢	65～70	71～80	81～90	90～	合計
男	1		1		2
女		1	3	1	5
	1	1	4	1	7

(1) 朝

(2) 昼

(3) 夜

平成26.11.15

理 念

高齢者の第三の住まい

高齢者生き生きグループリビング

てのひら



(財)JKA 競輪補助事業

運営 NPO 法人 てのひら

高砂市荒井町小松原一丁目7-13

電話 079-442-9161

高齢者の方々を敬愛し、共感と受容と尊重の中で、入居者の「自立と共生」を支援します。また、高齢者の方々が、日々ベストを尽くして残された大切な生涯を安心して歩むことができるよう支援します。

運営の目標

1. 高齢者の新しい住まいとしてのモデルになります。
2. 「自立と共生」を合言葉に、自主的に運営します。
3. 地域の方々とのかかわりの中で、居住者も自分のできることを地域の方々に提供していきます。
4. 互いを尊重しながら助け合って暮らしていきます。

概 要

開設	2011. 4. 1
構造	鉄骨3階建
面積	建物 413.14 m ² 個室 25.20～25.61 m ² (全室南向き)
構成	全室個室-(2階、3階) 7戸 ミニキッチン(IH 使用)、洗面所、 トイレ、クローゼット 共同部分-居間(共用ルーム2階) 浴室、屋上(1階 デイサービス)
費用 月額	家賃 49,000 円～50,000 円 共益費 15,000 円 食費 1食-約昼690円、夜550円)
その他	敷金 家賃の3か月分

講演 3 「東日本大震災からのメッセージ」

社会福祉法人 福島福祉会 モーニング 施設長 清野恭子氏

第一部 ～法人の歩み～

<社会福祉法人福島福祉会の歩み①>

- * 昭和63年 6月 社会福祉法人福島視覚障害者福祉会設立
- * 平成元年 4月 養護盲老人ホーム 緑光園創設
- * 平成 4年 1月 社会福祉法人福島福祉会へ法人名称変更
老人短期入所事業開始
- 平成10年 4月 在宅ケアセンターグリーンライト開設
老人デイサービスセンターグリーンライト
老人介護支援センターグリーンライト
- 11月 ホームヘルプサービス事業開設
- 平成12年3月 居宅介護支援事業認可

はい。それではですね。レジュメをご覧ください。先ほど冒頭にお話しましたが、3.11から3年8ヶ月、それぞれの自宅がありながらも、帰還できないこの現実。そしてこれからの福島の皆さんと共にそして子ども達の未来のために、私達は大切に引き継いでいかなければなりません。そのために今私たちができることを1個ずつ進めて参りたいと思います。まず、第一ブースが、法人の歩みということでございます。社会福祉法人福島福祉会、当法人は平成元年に、緑光園という目に障害を持った視覚障害者の専用施設として開設致しました。平成4年1月に社会福祉法人福島福祉会（現名称）と名称を変更しております。これは、設立時の法人名より視覚障害者の部分をとりまして一般の方々にも福祉を広め、ご利用していただくということで法人名を変更致しました。平成10年、在宅の方々にもご利用いただくために、在宅ケアセンターグリーンライトを開設しました。そして介護支援センター、ホームヘルプステーションなどのサービスを開始しております。

<社会福祉法人福島福祉会の歩み②>

介護保険制度スタート

- * 平成12年4月 指定居宅介護支援事業所・指定通所介護・
指定訪問介護・指定短期入所生活介護
開始
- 平成14年7月 評議委員会の設置
- 平成15年4月 福島県高齢者対策モデル事業
「高齢者グループリビングモデル」開設
- 6月 福島市温泉利用介護予防事業
「湯ったりデイサービス事業」開始
- 平成18年3月 居宅介護支援事業の再開
- 10月 外部サービス利用型特定施設入居者生活
介護(介護予防)緑光園 開始

<社会福祉法人福島福祉会の歩み③>

- 平成19年 4月 福島市飯坂東地域包括支援センター
指定居宅介護予防事業 開始
- 平成21年 3月 公益財団法人JKA(旧日本自転車振興
会)補助事業「高齢者生き生きグルー
リビング モーニング」開設
- 平成24年 2月 福祉避難所の指定(福島市)
- 11月 訪問看護ステーション 開設
- 12月 定期巡回・随時対応型訪問介護看護事
業所 開設
- 平成25年11月 夜間対応型訪問介護事業所 開設

その後、指定居宅介護支援事業所、そして短期入居生活介護事業も開始しております。平成14年7月には、評議委員会を設置致しております。そして平成15年4月には、福島県高齢者対策モデル事業を受託し高齢者グループリビングモルゲンを開設しました。モーニングとは異なりまして、県のモデル事業として福島県では当法人が唯一開設致しました。そして同年6月には今皆様がいらっしゃいますこちら飯坂温泉の旅館を利用したゆったりデイサービス事業を開始しました。月曜日から金曜日に福島市内の介護認定を受けていない方を対象に実施しています。これは、少しでも介護の状態に陥るのを少しでも遅らせて、自立した生活が続けられるようにということで、福島市の委託を受けて事業を開始しております。平成18年10月には、緑光園の入所者で介護の必要な方が介護サービスを利用可能な施設の中でも外部サービス利用型特定施設入居者生活介護を開始致しました。

平成19年4月には、福島市飯坂東地域包括支援センターの運営を福島市より受託し業務を開始しております。平成21年3月には、午前中に見学いただきましたけど、公益財団法人JKA（旧日本自転車振興会）補助事業として2つめの高齢者リビングモーニングを開設致しました。平成24年2月には、今回の震災を教訓として、福島市と福祉避難所の指定を交わしております。そして11月には、訪問看護ステーションを開設。そして12月には24時間対応定期巡回随時対応型訪問介護看護事業所開設。そして1年前の25年11月には、夜間対応型訪問介護事業所を開設致しました。



さて、レジュメの方に、グループリビングモーニングでの皆様の生活が掲載されています。朝一日のはじまり、モーニングで元気に朝を迎えられる幸せ。そして仲間と一緒に召し上がる朝のお食事、さらにお散歩に行かれる方、それは向かって右側の方です、この方も実は震災後に自宅からこちらの方に入居されました。今こちらの方介護5でございます。自分では寝返りうてません。入居された時は這っていましたが、部屋で転んで骨折し入院しておりました。でも、「早くおうちに帰りたい、モーニングに帰りたい」とおっしゃり続けておられました。主治医の先生のご協力のもといろいろな工夫をして帰れるようになりました。後ほどご案内します。

そして、お昼になります。向かって左上のところですが、これはたぶんおやつを作っているところだと思います。アップルパイかなにかですね。いま生地にたまごを塗っているところだと思います。そして右側の方ですが、アトリエにありますカラオケで今歌を歌っています。そして下の左側ですが、今日もお見えになっている方ですが、たぶん手巻き寿司を作って、皆さんと一緒に召し上がる場所です。その他にも餃子を作って夕飯

のおかずとして食べたり、先日もちょっと「園長先生、食べてくださ〜い」って餃子いただき、とても美味しかったです。そして右下でございますけれどもちょっと左のところに見えますが、マッサージ機もあります。当然ご利用の方もいらっしゃいます。



日中それぞれお散歩にお出かけされたりとか。そして右の方ですけれども、この方、今ヘルパーさんが見えまして、モーニングの中にあるお風呂に入浴するに当たりですね、ヘルパーさんにサポートしていただきながらお風呂に入るところの様子でございます。こちらの方はデイサービスも利用している方でございます。

そしてこれも、地域の方々と一緒です。夏祭りであるとか、お正月であるとか、といった祭りですね。近所の方や子どもさんもここに写っておりますが、お神輿をこちらで生活している方にも見ていただきたいということで、先日ですね、本当に好天の中、皆様が、本当に玄関先までお見せに来てくださいました。こういったね、地域の方々のお力があるからこそ出来るのです。あ、笛の音が聞こえて来たとか、太鼓の音が聞こえてきたとか、もうここから、自分の故郷自慢が始まります。はい。こうした楽しいひと時もね。施設の中でお住まいになってる方だけでは出来ないことだと、あらためて感謝申し上げます。



そして夕方でございます。お食事、今皆様夕方戻ってきてお食事をしているところです。先ほど申しましたけれども、要介護の方もいらっしゃるということでお話をしたかなと思いますけれども。下の左端にあります、これテレビ電話です。これ、ここに画像が映ります。そして何かありましたら、画面にタッチされますと上のカメラがですね、作動します。ご本人の顔がですね、事業所の方に届きます。ブザーを押していただいたり、胸にあるペンダントのボタンを押していただきますと、緊急時、テレビ電話で何かがあったということを確認出来ます。24時間、いつでもかけつけるという体制が出来ております。先ほど早く家に帰りたいとおっしゃっていた方のお部屋にも、こちらのカメラがベッドの脇にございます。もし、ボタンを押しても何も映らなかったら、何かがあったということで職員がすぐかけつけるということで対応しております。今ちょうど真ん中に写っている方は96歳の方で、とても元気でございます。そして、先ほどお話ししたように、年齢と共に

だんだん自分のおうちで、またはご家族と一緒に住まいになることが大変になってきて、今回の震災で我が家はあるけれども、戻れない。帰る場所はあるけれども、家はあっても、そこには戻れない。ということで、いろんな方々がここをもうひとつの我が家、というスタンスでおられます。私たちは、もうひとつの自分の安心出来る家と考えています。



そして今日も午前中、皆さんとお話していただきました伊藤さん、ちょうど真ん中に写っております。今ここにある冊子です。写ってますがこれはですね、なんと100歳万歳という月刊誌で、私の手元にあります。100歳万歳という月刊誌でございます。今年の5月にも福寿草、今年もきれいに咲いてくれてありがとう。という絵手紙が載っています。ごめんね。伊藤さん名前と年言っちゃって。89歳。黄色は元気な色、待ちわびていた様子が

よく伝わってきました。ありがとうございますよく表れています。ということでね、こういった冊子の方、応募してますよ。こちらの100歳万歳、この素敵なピンクのお花、バラです。こちら伊藤さん。こんな綺麗なバラが咲いたら、自然に微笑んでしまいそうですね。とても色が綺麗です。福島県伊藤〇〇って書いてあります。そしてもう一つ、書道の欄にも、入選しております。そして午前中見学していただいたアトリエのところにも、右側の方にございます。温故知新。私もご相談されたんです。「園長先生、今の時期はなんていう掛け軸掛けたい？」「伊藤さん、自分で考えて、自分の好きなもの持ってきていいよ」って言って、じゃあこれにする～って言ってかけてくださいました。ほんとに季節折々のですね、掛け軸、そしてお花を生けてくださっております。先ほどの食堂のところですね。絵手紙の方も、伊藤さんの作品でございます。

そしてその下に写っております、この方も震災の時に、いらっしゃった方ですが、今は24時間サポートを受けています。今ここにいらっしゃる皆様も、これから先も安心して迎えることができる高齢期、誰もが望んでいると思います。この誰でも訪れるその時に、今、あなたが思っている最後を迎えたい場所はどこでしょうか？やはりご自宅でしょうか？それとも病院でしょうか？やはり施設になりますか？私たちはその方のひとりひとりの人生が、お幸せに暮らせるようにと、日々職員一同サポートしております。本日はですね、本当に福島まで足を運んでいただきありがとうございました。私の発表はこれで終わります。ありがとうございました。」

ワークショップ

司会	慶應義塾大学	総合政策学部	教授	大江守之氏
講師	慶應義塾大学	SFC 研究所	上席所員	土井原奈津江氏
	NPO 法人	てのひら	理事長	石原智秋氏
	社会福祉法人	福島福祉会	施設長	清野恭子氏

[大江（敬称略・慶應義塾大学）]

1 時間半の時間の中で、私が最初にお話したように、グループリビングの理解を深めていくという事が目的です。グループリビングについては今日 3 人の方からお話があって、少しずつイメージがつかめてきたと思うのですが、まだまだ分からないことがあるのではないかと思いますので、最初に、グループリビングについてもっと知りたいこと、あるいは今日の 3 人のお話の中で、この点についてもっと聞きたい、知りたいというところから意見をテーブルで出し合って、質問をテーブル毎にいくつか出していただいて、答えていただくことにしたいと思います。たぶん 3 人の方以外に、今日このグループリビング運営協議会関係のいろいろな方が来てくださっているのです、その方々に振るかもしれませんので、その時はよろしくお願ひします。ということで、今日の話の踏まえて、グループリビングについて、もっとここが知りたい、ここがわからない、ということについて少しお話あいをして、各テーブルから最初の声をあげていただきたいと思います。それではどうぞ進めてください。

(各グループで話し合い)

[大江]

お話が尽きないテーブルもあるかと思いますが、各テーブルから話し合った結果について、発表をしていただければと思います。まず A グループからお願いします。

[A グループ]

いくつかの盲点が出てきていると思います。最後まで難しいところなのかなということと、あと金額的な問題で入れない人をどうするのか。これについては生活保護の方は、という話までであったものですから、私の方からちょっとここの中でお答えしてしまう格好になりました。基本的に、ここに集まって来たグループリビング協議会のメンバーのところは、中間所得層のことを考えてきていて、低所得者層のことは別途考えるべき問題と、おおよその合意になってるとお答えをしてしまいました。講演をしていらっしゃる方の中では、自分たちで作ってきたという意識があまりないので違うけれども、自分のところだと、お入り頂いた方達が、やはり自立とお世話になりたいという狭間で、小さな意見の相違があって、そこでうまくいかない部分もあるという率直なお話もいただきました。

[B グループ]

主旨がちょっと違うかもしれませんが、今日の初めて、施設の方に連れて来てもらって、かなりお金がかかっていると。今、競輪のところからお金をいただいて、建物建てて、回

っていると思うんですけど、30年、40年たって、劣化していった時に、そういうところにバックボーンについておいてもらわないと、継続して運営していくのが無理なのかなといった疑問を感じました。

あと、皆様から出ていた問題点としては、地域の方々がなにかの形で参加したいと思っ
ていても、行事とかいろいろなことに、どこまで立ち入ったらいいのか。どこまで民生委員
とか地域の方が、グループリビングで生活している人達の中に入って行ったらいいのか、
という不安、心配というものが出ていました。

[C グループ]

こちらのグループでは、グループホームと間違われる名称であるとうことなどが出てい
まして、グループリビングという名称の由来は、という質問が出ました。もう一つは、入
居対象者は自立可能な方とありますけど、その自立の度合いは、どの程度のものなのか。
例えば、介護されていても自立している方はいらっしゃるの、どの程度の自立度の方が
入居対象者かという質問がありました。3つめは、最近増えているサービス付き高齢者向け
住宅とグループリビングとの違いを知りたいという質問がありました。

[D グループ]

基本的には、中身が形としてグループリビングがこうあるべきだっという話よりは、日々
の生活の中で、何がお年寄りが一人で生活するうえで足りないのか、そういうものを共同
で生活するうえで手に入れているのか。グループホームを運営されている方だとか、中に
住んでいる方だとかの言葉の中に、そういう言葉がありました。それをトータルしてみると、
上から見たらこれがグループリビングなんだ、というところなのかな。

目の前に、婦人会の方とか、民生委員の方もいらっしゃったので、モーニングを見学さ
れて、伊藤さんの生活が素晴らしいという話とか。ただ一箇所だけのグループリビングの
見学だったので、中村さんの方からは、グループリビングっていうのはそういう一つの形
ではないという話があり、そこで時間が終わってしまったという感じでした。

[E グループ]

まず、介護保険制度の扶養と違って、人によって、収入所得によって金額が変わらない
のがいい点だと評価をする一方で、介護度が上がってしまうと、人手が足りるのかという
話がありました。グループリビングの費用+介護保険のヘルパー保険の金額が入ってくる
ので、金額的にちょっとしんどくなる恐れがあると指摘されました。

また、暮らしぶりなんですけれども、今日のモーニング様だと、最初の方は食事を作る
方もおられたが、今は自炊されない方が多いという話の中から、上げ膳据え膳では介護度
が上がってしまわないかとか、地域との関わりが薄くなってしまおうとか、施設ではないん
ですけど、在宅と比較すると頼ってしまうのではないかという意見が出ていました。

[F グループ]

グループリビングでは、入所する前の自立度は高めに設定してあるという事ですが、入
所後に認知症になってしまった場合、その後の対応はどうされるのかと話題に上りました。

その時により、介護サービスを受けたりしながら、入所は可能だということと、入所後に体調を崩されて入院したときのお金はどうなるのかということ。あとは、ひと月の経済的なことから考えて、年金だけで入所できるのか、できないのかと、Fグループでは基本的に金銭面について、話し合っていました。

[Gグループ]

先ほど、3つの発表の方聞かせていただきまして、グループリビングとはなんなのかということ、既存の介護保険を中心とする入所型の施設、老健さんですとか、特別養護老人ホームさんですとか、グループホームさんですとか、いずれも例えば、対象とする方が認知症とか要介護状態に陥っている方、基準っていうのは程度の面もあるにしても、グループリビングのコンセプトとなっております、自由な暮らし、自分らしく生活を送るという視点でいくと、一般の高齢者福祉センター全般に共通するテーマでもある部分ですし、今実際にそれをされてる中で、それとは違うグループリビングの支援ってなんなんだろうっていうのを、第三者の視点で考えて見たときに、今ひとつ見えにくい点、差がちょっとよくわからないという意見が出ました。

それで、先ほどからのお話でもありましたけど、介護保険の施設の場合ですと、職員配置人数ですとか、あとはお客様に対する生活支援の方向性っていうのがある程度、法制度の中で決まっている部分があるんですけど、グループリビングの場合ですと、そういう縛りからは抜けますので、抜けた中で、その方の生活を支援・サポートしていくというのはすごく大きなテーマだと思うんです。そのあたり各施設様、グループ様の方の支援のあり方についてももっともっと勉強させていただきたく、話を聞きたい、ということで意見がまとまりました。

[Hグループ]

Hグループは、グループリビングのもっとここが知りたいということで話し合いました。質問の方、3つということでしたが、1つだけになりました。このグループには、グループリビングに関わっている方が結構いらっしゃったので、ある程度解決した部分もありました。やっぱり、こういう施設関係のことを全然知らない方ですと、一番最初に出てくるのが、グループリビングとグループホームの違いが、疑問点として上がってくるみたいで、このテーブルの先輩方からいろいろなお話がありました。「そういうことなんですね」と納得しましたけれども、やっぱり関わってない方からすると、「まだ周知のことではないんだな」と感じました。

あとは、質問ではないんですけど、午前中モーニングの方を見学された方からお話があったのが、台所はとても素晴らしいんだけど、今は入所者の中で使える方がちょっと少ないよだというお話があったので、もっと有効に活用したらどうかというお話もありました。そちらの部分に関しましては、建設施設の職員ということですので、持ち帰って考えることができればなと思いました。

[大江]

台所っていうのは個室の方の台所ですか？共有の台所ですか？

[Hグループ]

個室の方の台所です。

[大江]

はい、どうも、いろんな質問がでまして、ありがとうございます。どういうふうに、進めていくかですけれども、まずグループリビングの名前の由来はなにかということですけども、これは、西條さんの本に書いてあったような気がするんですけど、どなたか覚えてますか？最上さん覚えてます？

[最上 (NPO 法人 COCO 湘南)]

管理されたり、管理してもらいたいとかじゃなくて、自分たちが目標をもって、コミュニケーションをとりながら生きていくことが、リビングだからという。ホームっていう概念は施設に通じてしまうというような違いがあったと思います。

[大江]

みんなが集まって住む、だからグループというところはグループになったんでしょうが、つまり名前としてはグループリビングの方が先なんですよ。介護保険制度ができて、居宅介護のなかに、認知症高齢者共同生活介護というメニューとしてできあがり、それをグループホームと呼んだ。認知症のことをよく勉強していた学生が昔、「認知症高齢者共同生活介護（グループホーム）」とパワポに書いていたんですね。でも、「認知症高齢者共同生活介護」っていうのはサービス概念ですよ。それで、「何故サービスがグループホームっていうハードウェアなの？」って聞いたら、その学生は分からなかったんですよ。私も分からなかったの、法律を読み直してみたら、グループホームは、認知症高齢者共同介護場と書いてあった。認知症高齢者共同生活介護というサービスを行う場のことをグループホームと定義しているということがわかりました。グループホームの方が後なんですよ。しかし、制度の中に据えちゃうと、みんな勉強しますからこういうもんだってだんだんわかってくる。あるいはこうしなきゃいけないということが決められているので、それが基準になって他を考えるようになる。結果として、グループリビングって違うんだなって話になってしまう。そもそもぜんぜんスタートが違う。ただ名前が似ているってだけの話なんです。

それから、お聞きになって不愉快になったらごめんなさいって最初に謝っておきますが。社会福祉法人の方は「入所」っておっしゃるんですよ。でも今法律でも、「入所施設」じゃなくて「入居施設」となっています。有料老人ホームでの介護について、最初は「特定施設入所者生活介護」って書いてあったんですけど、今は「特定施設入居者生活介護」に変わった。入居する場所は住宅なんですよ。だから、施設じゃないんですよ。施設か施設じゃないかっていうのは、分けて考えなければならぬんですけど、一緒に住んでるものはみんな施設だと思いがちなので、ここはやっぱり、考え方を改めなければならぬと個人的にはとても強く思います。住宅に住んでいるんだと、しっかりと認識しなければならないと思います。

グループリビングの由来とか、グループリビングとグループホームの違いに関してです

が、簡単な方からいきたいと思います。建物とかハードウェアに関してなんですけど、JKAのお金で作られたものなので劣化したらどうするんだという話がありましたけど、ちょっとこれは私のほうから、JKAの方に関係しているんでお話いたしますと、みなさんもちょっとびっくりされると思いますけど、グループリビングの補助金というのは、整備費の80%まで、総額1億円を限度として出される、極めて手厚い補助が行われたんです。あとは自前です。JKAは面倒を見てくれません、とそういう構造になっています。

キッチンがあんまり使われていないということですが、このグループリビングの建物の仕様はCOCO湘南台が全部モデルになってるんですね。そのために、アトリエがあったりとか、かなり共有部分もひろく取るような考え方が導入されています。これらが充分使われているのかどうかということに関しては、実際にグループリビングを運営している方に伺った方がいいと思います。私達のところはこんなふうにやっていますということについて、ご発言いただきたいなと思いますが、いかがでしょうか。食事の回数について、COCO湘南台は夕食だけはみんなで食べることにしています。それを踏襲して、夜だけっていうところもあれば、昼と夜を出してるところもあれば、朝昼晩出しているところもあるようです。このことと、個室のキッチンの使い方ってたぶん関係していると思うので、私達のところはこうやっている、ということを紹介していただけないでしょうか。どうでしょうか？川島さん、お願いします。

[川島 (NPO 法人 いぶりたすけ愛)]

朝食を提供していないので各自で用意しています。みなさん高齢になっていることもあり1年位前から朝食用のご飯を夕食時にお渡しするようになったのでキッチンを利用することも減ったかもしれません。当初よりはキッチンの使用頻度は減っていると思いますが使用している方は多いです。料理好きの93歳の男性は今でもおかずを作ってみんなさんに振る舞っています。来客も自由なのでお茶を出す等でもキッチンは必要だと思います。

[大江]

ほかのところは・・・松本さんのところはどんな感じですか？松本さんのところは、明日見学させていただくことになってます。

[松本 (生活クラブやまがた生活協同組合)]

米沢の結いのきといいます。現在、12人お住まいいただけるところを作っているわけですが、ゲストルームを含めて11名ご入居頂いています。個人のキッチンですが、60代が2名、70代が2名、80代・90代というふうに年齢構成は様々ですが、60代、70代の方は自分でキッチンを使っておられる方がいます。基本的に昼と夜は一緒に食べていただくということで始めましたが、60代、70代の方にお勤めをしている方もいて、そうすると当然昼間食べません。逆に朝食を食べられるということで、ほんとは朝食を作る予定ではなかったんですが、毎日朝食を出しています。ですから、朝食と夕食は人数が多くて、昼食が5名くらいですね。自分では作れない方が食べる、ということになります。キッチンを使っている方は、やっぱり自分で作られたものを持ってきて、皆さんに振る舞ってくださるときもあります。最近、困っているのは銀杏がよく落ちています。それを拾ってきて、ゆで

ですぐ持ってくるので、それはちょっと困っていますが。そういうふうに、ちょっとだけ認知症が入っている方も何人かいらっしゃるので困っている部分もあります。キッチンも、80代の方も作っている方もいるので、90代の方も朝食だけ食べている方もいますので、半分くらいは使われているという感じです。

[大江]

小島さんのところはどうでしょう？

[小島（NPO 法人 暮らしネット・えん）]

食事の問題だけで考えると誰が作っているという問題になると思うんですけど、先程から大江先生がおっしゃっているように、住宅なんですよ。言ってみればアパートです。うちは夕食しかつけていません。昼食が欲しい人は、配食サービスをやっていますので、とってください。朝どうしても具合が悪いときには、隣のグループホームがありますので、相談をしてくれれば作ってお届けすることができます。夕食を食べるというのは、一緒に食べることによってコミュニケーションを調整して、見守り機能を作るということで、食べることはファーストではなくて、セカンドだという風に私たちは皆さんにも申しあげています。食べる食べないのは○ついたり×それだけなんです。一応食べることになっています。3ヶ月間ピースボートに乗って外国旅行に行っちゃった人もいるぐらいで、まあ、普通の高齢者がちょっとした安心が欲しいために、一緒に暮らしているだけ、うちのグループリビングはそういう風に考えているんですが、他のところはとても親切なので、うちのグループホームの方には聞かせたくないです。以上です。

[大江]

それじゃあ前の二人の方から、食べるという事も含めて、石原さんと清野さんお願いします。

[石原（NPO 法人 てのひら）]

私どもの方は、お昼を中心としております。お昼にしっかり栄養をとっておけば、あとの食事は適当でも大丈夫だろうとの考え方です。でも最近は夜、皆で食べようと自分たちで考えられて、本体の方から、配食のような感じで、夜は運んでおります。で、それを皆さんそれぞれ自分たちできちんとテーブルに準備されて、自分たちであとは洗ってという事をされております。お部屋のキッチンはじゃあどうするんだ、ということなんですけれど、普通、キッチンが無いおうちって無いと思うんですね。やっぱりキッチンというものは必要で、使っていなくても必要だと思っております。日曜日の食事は、わたちどもの方はないんですけど、できるだけご家族の方に関わってくださいねというふうに、入居されてお住まいになられる時にはそういうようなお話をしております。日曜日にはご家族の方がお食事を作られたり、それから必要な方はヘルパーさんがそのキッチンを使って何かを作ってくださいというようなかたちです。やっぱりお部屋には住まいということでキッチンは必要だと思っております。

それから、入居者の中には、働いておられる方もいらっしゃいますので、基本は出しま

すが、いない人はいないで、ちゃんと申し出ていただいています。お昼も基本同じですが、いらっしゃる方には、私どものお食事を食べていただいております。

[清野（社会福祉法人 福島福祉会）]

グループリビングモーニングですけど、パンフレットの方にもあるように、当初はですね、朝食はご希望に応じてということなんですね、そういったことで今もほぼ、全員の方が朝食を召し上がる形にはなっております。あとはお昼はですね、デイサービスをご利用の方もいますし、お昼を召し上がらない方もいます。パンを食べたいとか、おうどんをお昼は食べたいとか、そういった方もいます。あとヘルパーさんを利用している方もいるので、ヘルパーさんに自分の好きなお野菜のあいものを食べたいとかそういったご希望でそういったサービスを利用している方もいます。原則、希望があれば三食というふうにしていきます。

[大江]

ありがとうございました。やっぱりそれぞれ違うし、それから例えばもちろん入っている方々の年齢によって違うと思います。あと周辺の環境が都市的な環境で、食べるところがちょっと行けばあるというところなのか、それともそうじゃないのか、というところで違ったりしているんじゃないかと思います。私は小島さんのお考えに近くて、以前グループリビングとは何かって聞かれた時に、10人の一人暮らしであると、答えたことがあるんですね。一人暮らしなんだけど、10人集まっている、たまたま集まって住んでるだけで、集めることによって、ケアサービスを効率的にそこに供給するっていうような、集めることによって効率よくなんかするっていうまとまりじゃないっていうのがたぶんグループリビングの基本だと思うんですね。10人まとまっているように見えるけれども、それはまとめて何かしてあげようって事とはちょっと違うということなのかなっていうふうに思います。また、運営をしている事業体の成り立ちとか、持っている資源とかによってもやっぱり違うのかなというふうに思いました。それからサ付きとどう違うのかという話がありました。サ付きはいろいろあるので簡単には言えないのですが、大規模なサ付きは40室、50室、場合によっては100室とかあるみたいですけど、そういったサ付きとは比較にならないと思います。ただ、小さいサ付きも結構あるので、それらは比較対象になるかもしれないし、もしかしたらグループリビング的な運営も可能だと思います。サ付きは最低限見守り・相談の機能がついていけばいいわけですから、さつきの制度を使って、補助金もらって建物作って、あとはグループリビングで運営すると、いうのはあり得る選択です。

こうしているうちにもう4時になっちゃってあと30分しかなくなってしまったのですが、肝心の「サービスの出し方」ということで、特に認知症になったときとか、それから介護度が上がったとき、これをどうするのか、ということについての関心があったと思います。最後はターミナルケアまでいけるのかとかですね。グループリビングが提供するサービスというのをどう考えるのか、ということなんですけど、これについてはどうでしょうか？今日は小島さんに頼りすぎますが、もう一回意見をうかがっていいでしょうか。

[小島]

うちもまだ3年ぐらい経ったところなので、10年ぐらい経つとまたいろんなところが変わってくるんじゃないかと、理解した上で申し上げるんですけど、私、西條さんにこのことで初めてご相談した時に、年齢差は20歳くらいつけなさいと言われてたんですね。それは一斉に加齢しない、一緒にさりげなく見守り合うためにはそれぐらいの年齢差、そういう形が必要なんだと言われました。見ていると、お選びくださる方達ってなんとなく似た方達、どこかしら共通項のある方たちが選んでくる。なるべく施設には入れられたくない、自分で決めて最後まで生きたいという方がほとんどです。そういう中で、初めからうちの場合は自立という定義は、寝たきりでも自立。自分で意見が伝えられて、こうしたいということが言える限り、これは自立です。

認知症の方は自立ではないとは私は思っていないんですが、ひとつ違うのはやっぱり、昼夜逆転があったりして、病気の性質上、他の方と暮らしている時にサポートがないとうまくいかない病気だということなんですね。入るときに、認知症の中度になったら、うちは隣にグループホームありますよって、初めから伝えてあります。うちの場合です、見られるところはそれでもいいと思うんですが、私どもの場合は、認知症の方は中度になったら住み替えということが必要なんではないかと申し上げています。

たまたまそういう方がすでに現れました。これはちょっともう中期に入りかける段階かなということは見えてとれたんですが、社会性がおありなので、他の方に見守っていただいて、暮らしていけるんじゃないかということで、1年間ほんとうに見事に見守ってくださったんです。夕方になるとやっぱり夕暮れ症候群で出かけてしまうときに、ほかの方が「何しにいらっしゃるの」と、ポストに行くということで、じゃあ一緒にポストに行きましょうって言うてくださったりして、1年間経ったときにグループホームに入ったので、どうしましょうということ、ご本人にもご家族にも、ご家族は遠いご家族だったんですけど、ご家族にもグループリビングの皆さんにもお聞きしました。グループリビングの方たちは向こうに行ってくれとは誰も言わなかったですね。難しいところだねというふうにおっしゃられましたけれども、結果的にグループホームに入っていただきました。そしたらやっぱり入ったほうが正解だったんですね。すごく気を使っていたというのが入ってからわかりました。なおかつまだ関係も続けているというところで、住み分けるという事も大事だな、でも交流もできていて。良く憶えていないけど、「お久しぶり」ってご挨拶されてる。そうすることで、グループリビングが最後までいけるかどうかは、個別だと思っています。

こちらでいけると思っても、本人がこわがったらできない。家族が難しいとおっしゃったらできない。ただ本人が何が何でも言ったら、できちゃうっていうのを訪問介護などで見てきたので、グループリビングは絶対にできるんですね。それは本人の覚悟ですね。そういえば、このごろ厚労省が国民に向かってそういう事を言ってるんです、最近。地域包括ケアシステムの中に家族と本人の覚悟って言葉が。国に言われたくないよと思うんですが、自分がどう生きていくのかって選ぶときには私はグループリビングに最後までいたい。いざと言うときにサポートできる体制があるということはとても大事だと思います。長くなってごめんなさい。

[大江]

今日ここにはいらっしやらないんですけれども、COCO 宮内という川崎にあるグループリビングは、運営主体がまったくケアの経験がない事業体がやってるんですね。そうすると小島さんのところみたいに、認知症になったらグループホームに行きなさいということができないので、どうするかというと、もちろん本人の気持ちを尊重して、できるだけ本人が住み続けたいという気持ちを尊重するのですが、やっぱりもうそれ以上できないというところになったら、本人にもご家族にも話して、次に行く場所を探すんですね。その結果としてCOCO 宮内は周囲にどういう有料老人ホームがあるかというような、周辺の施設や住まいの情報をだいぶ蓄えてくるようになった。そこを一緒に見に行ったり、転居したら遊びに行ったりというふうにして、いなくなったらはいおしまいじゃなくて、関係が続けるっていうふうにやったりしています。やっぱり事業体が持っている力とか支援によって違ってくるんだと思いますね。

支援のありかたっていうのはだいたい答えが出ていると思うので、もう一度皆さんで話をしていただきたいんですが、もう残り時間が少ないですね。あと20分しか時間がないんですが、清野さんに聞いたら、皆さんどういふことで困ってますかというような事を率直に伺ってもいいんじゃないかということだったので、その点についてお話し合いをしていただけますか。高齢期をどんな状態でも豊かに暮らしていくということの中で、一番解決しなければいけない大事なことはなんなのかという事を5分くらい話していただいて発表していただくことにします。

(再度、各グループで話し合い)

[Hグループ]

話の方がなかなかまとまらなかったんですけど、最後に出た意見の1つとして、一番は自宅の方で、我々の方の事業所の方になるんですけども、定期巡回、訪問介護、看護サービスを利用して、在宅の方で生活できればいいんじゃないかなと、一応そういう意見が出ましたので、報告させていただきます。

[Gグループ]

入られた時点で、毎月の費用をギリギリ支払えるくらいで、何年か経過してくると、身の回りの事が自分1人では対処しきれなくなってしまう。その補助として、介護保険サービスや、別の有償サービスを使い生活するとなれば、経済的にいっぱい、いっぱい。かといって、家族の方の支援を受けようにも、いろいろな諸事情があって、受けるに受けられない、でも、自分1人でも対応はできない。でも、グループリビングを出たくない。そういうジレンマの中で、どういうふうにやっていったらいいのか。かといって、毎月の費用を下げるっていうことはまず難しい。そうしたリアルな意見が出ました。

[Fグループ]

我々Fグループでは、みなさんが今後、認知症になりたくない、家族や周りに迷惑をかけたくない、お金をかけたくない、金銭的な部分で話が終わりました。

[E グループ]

今、寿命が長くなって、子供に迷惑をかけたくないという気持ちがある。その中で、どうやって生きていけばいいのかというところで議論が終わったという感じです。

[D グループ]

ひとつ困り事が出ました。具体的には、15時から16時までおやつのあるんですけど、2~3人しか集まってこなくて、おしゃべりをする機会がその時はないってことです。いろいろお聞きしたら、食事では集まってはきますが、おやつ時間に集まらない人は、食後もすぐ部屋に戻る人が多いという困り事をおっしゃられました。

[C グループ]

こちら、あまり話がまとまりませんでした。ひとり暮らしで自宅を離れなければならないことになっても、馴染みの場所であったり、馴染みの人に囲まれながら安心した暮らしができたらいいなというような話しになりました。

[B グループ]

高齢期を心豊かに暮らすにはということに対しては、先立つものはお金でしょう。我々、若い時代に老後の暮らしのことを具体的に考えていたかと言えば、このメンバー、あんまり考えていなかったよねって。今の高齢期のありようを見ると、やっぱりお金のある人はそれなりに豊かに暮らしているじゃないか、だったら、若い世代の人達は若いうちから老後の事を頭に入れて生活していきなさいよと、そういう教訓的な話になりました。私たちに家族、娘や子供や孫たちがいます。私達の世代が迷う世の中、年金も下がるし、暗いことばかりですけど、敢えてできることは、我々以降の若い世代に「しっかり老後の事を考えて生きていきなさい」と提言、特に大学教授の先生方も今の大学生たちに、しっかり教育していただきたいなという、そんな感じです。

[A グループ]

うちは、具体的な困り事、高齢期になって何がネックかというところで聞きました。米沢の方は雪、雪が掃けなくなったら、なかなか暮らせなくなる。やっぱり、地域によって事情が違うんだなということを感じました。あと、町会に関わっている方たちは、町内会での加わりっというのがあるんですけど、公助共助が特に期待されているなか、それに対する認識の差みたいなものもあるし、町会長さんも、任期の長い方とそうでない方のギャップがあると話題に上りました。地域とのかかわりについて、今いろいろ言われていて、大事になってくるころなので、やっぱりみんなで考えていくべきことですよってところで終わってしまいました。

お金という話なんですけど、お金だけじゃないよというのを言っておかないと暗くなってしまいます。私の知り合いのケアマネが東京で一番お金持ちが集まる田園調布でケアマネをしています。大きな豪邸の中でひっそり飢えている高齢者が、ギリギリになって見つかるケースが結構あると聞きました。金があればいいんじゃない、やっぱり人と人の縁というのも大事だということも教えといてください、先生。

〔大江〕

ありがとうございます。ちょうどあと残り 5 分くらいになりましたので、まとめをしなければいけません。グループリビングが新しい暮らしのスタイルを提示して、その良さがあるということはだんだん広まってきたということではありますが、でも、もともとのモデルが、小島さんのおっしゃったとおり、厚生年金をもらっていた旦那が亡くなって、遺族年金があつて自分の国民年金分があるという主婦層みたいなのところにあるかもしれない。最初の仕組み全体の設計が、テレビの中で紹介されていたように、入居金 370 万、毎月 13 万 7000 円で、番組の中では「格安」って出てましたけど、たぶんあれご覧になって格安ってのはなんと反発された方もいらっしゃると思う。そういうモデルではじまったので、ちょっとそれに引っ張られているところがあります。あそこまでじゃなくてもできる部分っていうのはあるかもしれないというのは分かりました。もう少し違ったモデルを考えていけると思いますし、それからお金でやり取りしない領域というのをどうやってその中に組み込んでいけるかということも一つのテーマです。今いろんなところで共助の議論に巻き込まれることが多いんですけど、共助の考え方は古いというか伝統的な考え方の方になってしまいがちなので、なんかそうじゃない共助のあり方というのが大事だと思います。例えばそれはグループリビングの中で発見できているかもしれないと思います。共助をどう考えていくか、お金とサービスを交換する以外の部分をどう豊かに作っていく方法ってものを我々共通のテーマとして考えていかなきゃいけないんじゃないか。家族はお金のやり取り無いわけです。そういう非貨幣的な領域から出るとあとはすぐに貨幣的な領域しかない、もし日本社会がそうなっているとしたら、家族以外に非貨幣的な領域を作っていくことが大事ってということなんだろうと思います。でもそれは貨幣領域と全く関係のない形では成り立たない。「ご近所で助け合いましょう」だけではうまくいかない。そういうことを我々共通のテーマとしていければ、またグループリビングの暮らし方を参考にしていくことができれば、グループリビングに入れなくても、豊かなくらしというものに、近づいていけるんじゃないかと、そんなふうに思いました。いちよう時間は守るということで、終わりにしますが、私はあんまり司会が上手じゃないので、皆さま方に十分な機会を提供出来なかったかもしれない。テーブルで話し合っ、お知り合いになった方々の関係を大事にさせていただいて、またこれからの活動にいかしていただければと思います。今日は長時間どうもありがとうございました。

■□■米沢ワークショップ 2014年11月16日(日) ■□■

講演1「わたしはどう生きたいのか」から始まる住まい

NPO法人 暮らしネット・えん 代表理事 小島美里氏

(DVD 上映)

今のDVDを見ていただければ「えんの森」の暮らし方はほぼわかっていただけたかなと思うんですけど、ご覧になっていかがでしょうか？なかなかいいDVDになったと思ってまして、私達もお見えになる方には必ず見ていただいています。グループリビングというところの要旨をきちんと捉えてくれているかなと思います。今日はたぶんグループリビングという言葉が今回初めて聞かれたような方をお見えになっていると思います。どれくらいいらっしゃいます？やっぱりちらちらいらっしゃいますね。グループリビングってとても概念が難しいというか曖昧というか、昨日も福島の方でも、サービス付きの高齢者専用住宅とどう違うのかとか、グループホームと間違われるとかいろんなことがあったんですけど、今のDVDをみて少しわかっていただけたんじゃないかなと思います。

暮らしネット・えんの目指すこと

- この法人は、高齢者・障がい者の支援事業、調査活動、学習会、文化活動等の活動を通じて、高齢になっても、障がいがあっても、おとなも子どもも、共に生きる地域社会をつくることを目的とします

ここにいたるまでの経過をちょっと皆さんにお知らせをしたいと思います。私どもの法人の目指すところは、法人の理念というところで書かれているんですが、『この法人は高齢者、障害者の支援事業、調査活動学習会、文化活動を通じて、高齢になっても障害があっても、大人も子供も、共に生きる地域社会を目標とします』。これを目指して、様々な事業を展開してきたと申し上げていいと思います。

暮らしネット・えんのこれまで

1990前後	全身性障がい者2人の介助ボランティアとしてスタート
1996. 4	堀ノ内病院ケアサポートステーションMOMO誕生
2000. 4	介護保険制度開始
2003. 2	NPO法人暮らしネット・えん設立
2003. 4	ケアサポートえん、デイホームまどか開設
2003. 10	ケアプランえん開設
2003. 11	暮らしネット・えん建物完成
2003. 12	グループホームえん開設
2004. 1	デイホームえん開設
2007. 2	多機能ホームまどか開設
2009. 11	毎日介護賞グランプリ受賞
2011. 9	グループリビングえんの森開設
2013. 5	食事サービス・えんの食卓スタート
2014.	認定NPO取得 認知症カフェスタート

暮らしネット・えんの目指すこと

- ☆「わたし自身が受けたい介護」を地域につくる
- ☆地域で暮らし続けるために必要なサービスを地域の仲間と共につくる
- ☆地域の介護や福祉情報の発信基地として。講演会や学習会の開催
- ☆地域福祉活動の拠点
- ☆介護サービスの質の向上を地域の介護サービス事業者と共に目指す
- ☆みんな地域で共に生きる仲間。障がいがあっても、認知症があっても、寝たきりでも

わたくどもの法人は、だいたい今から 4 半世紀前になりました。1990 年前後ということで、介護保険の話ができたころだと思ってください。このあとに、ゴールドプラン、新ゴールドプランというふうには、超高齢社会を見据えた政策が出てきています。そのころにある日突然、障害のある方に会いましたとき、というところからはじまりまして、この話をしていると 1 時間はただいってしまうような面白い話があるんですけど、お二人の障害のある方と出会いまして、二つのグループができたんです。ひとつのグループは米沢のこちらの結のきさんと同じように生活クラブ生協の助け合いを使ってスタートをしています。ということで、ご縁が深いところもある、という事をご了解ください。その後いろいろありまして、病院の一部門になって本格的に介護の仕事を始めました。1996 年のことです。最初から NPO になりたいようなもんだったんですけど、NPO 法人という法人格ができたのが 1999 年でしたので、間に合いません、近くの病院の中の一事業になりました。これからの高齢社会を見据えて、病院も往診と訪問看護だけでは、在宅介護の人が看られないということで、「私たちが訪問介護を人とお金持っているから入れてくれない？」と言ったら、はじめは目を白黒させていた副院長がよそで話を聞いてきて、これはしめたということで、お互いの利害が一致してはじまったところです。

暮らしネット・えんの日々 ケアプランえん お仕事です！



暮らしネット・えんの日々 訪問介護スケジュール調整中



暮らしネット・えんの日々 ある日のデイホームえん

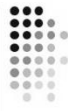


暮らしネット・えんの日々 多機能ホームまどか 建物



暮らしネット・えんのしごと

- ★相談：ケアプランえん(居宅介護支援)
- ★訪問：ケアサポートえん(訪問介護)
- ★通う：デイホームえん(認知症デイサービス)
- ★暮らす：グループホームえん
- ★通って泊まって訪問して：多機能ホームまどか(小規模多機能介護)
- ★お出かけ：移送サービス事業
- ★地域と共に：バザー、お花見、地域福祉、認知症カフェ
- ★文化事業：高齢者のためのコンサート、こもれびコンサート
- ★共に学ぶ：認知症地域家族会、インターンシップ・各種研修
- ★住まう：グループリビングえんの森
- ★食べる：えんの食卓(配食サービス、セントラルキッチン)



その後介護保険制度が始まっていくんですが、病院のなかでもいろいろな事がかわって行って、2003年にNPO法人を設立することになりました。NPOになってから、順々に事業を増やし、ケアマネジャー、訪問介護、認知症デイサービス、認知症グループホームの5つの介護保険事業と障害者支援事業をやってまいりました。そうした事業がある程度まとまってきたというところでグループリビング

に手をつけたのですけれども、グループリビングの生みの親の西條さんと、わたくしは30年以上のお付き合いがありまして、私も埼玉県の新座市の地方議員で、大先輩の地方議員として活躍していらした西條さんにいろんなことを教えていただいたんです。勉強会が終わって、夜の懇親会が終わったあとに、西條さんが「私は年を取ったら、仲間と一緒に暮らしたい」とおっしゃった、これがグループリビングの元の形だったんですね。彼女はまだ50代になるかならないかと思うんですけど、もう自分の高齢期の住み方を考えてるんだって、とてもびっくりして印象に残っております。そうしましたら、私どもが事業をはじめた頃ですね、やはり西條さんもCOCO湘南台というグループリビングを始めたこと知しまして、お電話をしたら、「あなたも高齢者に関わる仕事をはじめたのなら、グループリビングを作りなさい、それについては助成金もあるから、助成金がなくなるまえにおやりなさいよ」ということを教えていただきました。

もう一つ私達の中にはひとつはっきりとした目的というかこれは必要だという考え方が生まれたのは、訪問介護とか在宅の支援を中心にした活動の中からです。高齢の方々がなんでおうちで暮らせなるかという、古い30年くらい経った家というのはバリアだからで、ちょっと足が悪くなった、車椅子になってしまったなんていうことになると、家から出ることもままならない。で5階建ての古い公団住宅なんかは、デイサービスに行きたくても降りられない、ということが起きている。そういう状況を目の当たりにしまして、住まいさえちゃんとしていれば、最後まで自立して暮らしていける、自宅という形で暮らせる人がいっぱいいるということも知りました。そういう事情の中で、やっぱり「住まい」が欲しいねということも、みんなの中から上がってきたわけです。

2007年ごろだったでしょうか、COCO湘南台を見学して、その後グループリビングの設立検討委員会というものを立ち上げました。JKAの非常に潤沢な補助金がいだけけるというので、大喜びで始めて、これ応募して外れちゃったら結構大変だったんですね。設計図からなにか全部引いて、見積もとってということですので、だめだったら大変だったなって今更思うんですけど、そんなことで1年がかりで補助金の申請の準備をしまして、それで3月に決まりました。これが2010年度の事業だったんですね、ですから2011年の3月31日に終わっていなければいけない。ところが、またちょっといろいろな事が起こって、着工までに時間がかかってしまったことと、それから始めてようやく先が見えたと思った

ら、もうあと壁だけだ、内装だけだ、という頃に震災が起きてしまって、それでどうかなってしまっただけというほどの被害は無かったです。資材の最後の部分が入らなくなってしまうようなことがあって、結局、竣工が7月の末になりましたね。ということでまあ、苦労をして立ち上がりました。



私どものグループリビング、他のところと話をしている特徴的なところは、たぶん、検討委員会のメンバーが半数は入居された、ということですね。聞いてみると検討委員会の時は私も入りたいたいと言って、頑張って一生懸命準備をするんだけど、いよいよできると、「まだ私は早いわ」という方が非常に多いという話も伺いました。どうしてかなと思ったんですけど、介護とか、社会福祉とか、医療の関係者が非常に多いんです。ということは、高齢期というものをよく知ってるんですね。どうなっていくか。介護をうけなくてもいろいろ大変なことができてくる。おまけにその方たちみなさんお一人になってました。そういう方たちだったものですから、60代70代のうちにパッと決断されて入ってこられたこういう住まいを選ぶ方って、社会福祉関係者や医療関係者が多いという話なんですけど、おそらくこれは、高齢期というものをまざまざと見ていて、早めに手をうっておかないと危ないよという事がわかっている方達だと思います。

9月1日をスタートにしましたので、3年の間に12名の方が入居されて、すでに3名の方が退居されています。1名の方ははじめからこの方はもうちょっといろいろ見てもらえるところの方がいいのかなと思ったんですけど、急遽いろいろな家庭の事情ができて、すぐにお入りいただいたというケースで、数ヵ月後にやっぱり有料老人ホームがいいと言って出て行かれた方1名。もう1名はやっぱり娘と住みますと言って、地元に戻られました。で住まい方としては、グループリビングの設計をそのまま自分の部屋に当て、台所をつけるという事は、ここと同じにしましたよ、とおっしゃってましたね。あと1名の方はグループホームの方にお入りになりました。午前中、拝見した結いのきさんの方も、グループリビングからグループホームへという方が結構いらっしゃるんですけど、私どものところは、入居の条件に認知症になったら隣に行ってくださいと、申し上げます。認知症になったらといっても、いわゆるピック病とか、激しい症状を持つ認知症じゃない場合は、発症したなちょっと変だなというところから始まって、グループリビングでは暮らせないまで症状が進むまで時間がかかるんですね。だんだんに隣に移っていく準備をすればいいからってお話をしましたら、やっぱりご両親が認知症で苦労された方は、「それなら余計おたくに入りたくなった」というふうにおっしゃいました。その通りになる方が1名お入り

になって。入られた時に認知症の初期であるということは確認をしていました。やはりちょっとしたことにはあったんですけども、社会性がお有りなので、一緒に暮らしていくことには不都合はなかった。ただ薬なんかを飲み忘れるので、食事の時に飲めるように、その方だけに、別の契約で隣の事務所からヘルパーを派遣して、服薬管理とかをしてたんですけど、食卓の上に置いた薬を（ここまではヘルパーの仕事です）ごはん食べ終わるとみんながじーっと見ている、「薬飲んだ？」って聞いてくださって、ほんとにみんなが見守ってくださいって、1年以上をここで一緒に暮らされて、隣に移っていったんです。その時とっても私もとっても不安だったんです。入られてしまったら逆にとても安心されて、本人もびのびされて、それまでは本当にやっぱりこの中で自分が一番みんなの役にたてないっていうふうに、自分を理解してらして、そのへんたぶん辛かったんだろうなと思うんですが、隣に来てみたら一番できる人なわけですよ。そうしますと、自分よりいろいろできない方に向かって、いろいろ指図するわけですよ。まったく違う生活が始まって、なおかつ、さすがに家にいる時以上にいろんなコントロールができるようになったので、持病の数値がよくなったりとかということがグループホームの方ではおきました。ですからやはり、同じ法人の中に、認知症のグループホームがあったのはよかったなと思いますね。隣同士なものですから、たまにはお見えになって旧交を温めていらっ

しゃいます。



暮らしネット・えんの日々
グループホームえんのお部屋

もう一つうちの特徴はほぼ、ほぼ新座市在住在勤、となりの自治体くらいの方達にお入りいただいています。

今の入居者の年齢としては60代が3名70代が3名、80代が5名、来年になるとこれが一人数ずつ増えていきまして、60代2名、70代が1人増えて、90代が1名、というふうになっていくんですが、いいバランスです。西條さんに教えていただいた事がいくつかあるんですが、入居者は20才年くらいの年の差があったほうがいい。そうじゃないと一斉に加齢してしまう。ありがたいことに選んだわけではないんですが、そうになりました。「若い人たち」と呼ばれ、自分たちも60代は若い人と自認し、その方たちがご高齢の方たちをなんとなくサポートし、高齢の方達は、若い人たちが留守の間、まあお仕事もっている方もいらっしやるものですから、留守を守ってるみたいな感じもあって、なかなかいい関係になっていらっしやいます。とはいえ、いろんなことが起きて、ちょっとしたいさかきもあれば、頭を悩ます事もあるし、仲介に入らなければいけないかな、という事もあるんですが、やはり年の功ってすごくて、自分たちで解決されます。ホントにギリギリでちょっと大変だなと思ったこともあったんですが、自分たちでの解決能力をお持ちです。

それからDVDでも紹介されていまして、あんまり行き来をしません。人の部屋に入り込んでという様子はみませんし、夕飯以外の時間にリビングルームを使うということもそんなにないです。たまにDVD借りてきて、映画会をやったりね、それが「望郷」と

いうえらい古い映画だったりするんですけども、まあそんな事をされているようですが、「もうちょっとここを使って一緒にしたら？」って話たら、「いいの」っておっしゃいました。「夜になって、皆にあっておしゃべりができる、それだけでいいんです」っておっしゃいましたね。西條さんは「ちょっと冷たいぐらいの関係の方がいいのよ」って言われたんですが、ある意味ちょっとクールな関係のグループリビングだと思います。一人ずつにはいろんな闇やいろんな不満があるかと思うんですが、まあこんなもんなのかな、今落ち着いてるのかなと私は見ております。中での解決能力を大事にしていかなければいけないと思っております。



あと、グループリビングの中で、「認知症カフェ」というのをやっていて、その日にグループリビングえんの森にいらっしゃる方は全員参加で、ボランティア参加の方もいればお客様参加の方もいるし、それから話相手になってくださる方もいたり、大変ありがたい存在です。グループリビングまるごとあの方たちがいらっしゃってくださるので、認知症カフェができるという状況になります。

そうですね、それから歯に絹を着せないわたくしが、入居希望の方に必ず申し上げることがあるんです。だいたい「ここではどこまで見ていただけますか？死ぬまでいられるでしょうか？」って聞かれます。「それはあなたが決めることだ」と申しあげます。実はうちの場合一んなサービスを持ってますし、医療環境も悪くないので、ご本人がその気になればおそらく最後まで見ることはできますし、環境がずっと悪い中で、看取ったケースもわたくしどもの居宅ケアマネジャーや訪問介護ではいっぱい持ってますから、できるんです。ただできるのは、本人の覚悟というところがあるので、ご本人がその気になればできます。そこはみなさんがどうお考えになるか。それから何をしてもらえるかではなくて、何をしてもらうことを望むのかを伝えて欲しい。それが自立だと私どもは考えています。自立っていうのは介護がついたら自立じゃないとか寝たきりになったら自立じゃないというふうには考えてはいない。やはり自分の意志はきちり、寝たきりでも、もうターミナルになっても、自分の意志を伝えることができるのが自立だというふうに私たちは考えていますので、そこを自分で決定していくこと、ということをお話をしております。

ですから私のタイトルの中に、『私はどう生きたいか』から始まるグループリビングと書いてあるんですけど、やっぱり日本の施設というのは、圧倒的に家族に入れられるところなんです。うちは自分から入ってくださいというふうに申し上げています。うちに入る人は自分で望まないで入る人はお断りしますって本当に言うんです私。でもその結果としてまあそこそこ向いた方が入ってらっしゃるかなと思います。今一部屋空いていてなかなか決まらないですけど、気長に待って、ここに暮らしたいというふうに思って入居される、そういう方に入っていたいただけたらと思います。以上でございます。

「わたしはどう生きたいのか」から始まる住まい

グループリビングえんの森

1. 「グループリビングえんの森」以前（添付資料参照）
 - ①全身性障がい者介助ボランティアから始まったNPO
 - ②医療法人の在宅福祉部門を経て独立。NPO法人に
 - ③5つの介護事業を立ち上げる
 - ④「住まい」がほしい！住環境が自立の妨げになる高齢者
2. 「住まいがほしい！」から始まったグループリビング
 - ①まずはCOCO湘南台見学から
 - ②グループリビング設立委員会を立ち上げる
 - ③JKA補助金採択から開設まで
3. さて、グループリビング始まりました！
 - ①入居者中5名が検討委員会メンバー
 - ②3年間の入居者12名内訳
 - ・退去3名：有料ホーム1名、娘と同居1名、グループホームえん入居1名
 - ・前の住居等：新座市6名、隣接市2名（新座市内に勤務）、県内1名、他県1名（子が新座市在住）、都内2名（内1名親族が新座市在住）
 - ・入居時年齢：60代3名（有職者）、70代3名、80代6名
 - ③毎月第2火曜日に「自治会」開催
 - ④カフェやコンサートをリビングルームで
 - ・認知症カフェ毎月1回開催。入居者ボランティア多数
 - ・入居者主催のミニコンサート
 - ・法人行事（勉強会、各事業所のお楽しみ行事等）
4. 「グループリビングえんの森」では
 - ①「あなたはどう生きたいですか」から始まる「えんの森」の暮らし
 - ②見学者、入居希望者多数だけど…「まだ早いです」or「もっとサービスがあるところがよい」
 - ③認知症中度になったら隣のグループホームえんに
 - ④本人の意志があれば、ここで人生を全うできる備えあり

講演 2 「地域に根ざしたグループリビング」

NPO 法人 じゅげむ館きたみ 理事長 中村雅充氏

みなさんこんにちは。今ご紹介いただいた、北海道の北見市から来ました中村です。北海道の北見と言いますと北の最果てで、雪の中から出て来たのじゃないかなとみなさん思われると思うのですが、実は雪はぜんぜんありません。今年はまだ雪は降っていません。北海道は真ん中に大雪山と言う大きな山があるのですが、山の東側はほとんど雪はありません。その代わりに空風が吹き、気温は低い所です。山の西側は、札幌市、旭川だとか日本海側、この辺はものすごい多雪地帯です。その様なところから出てきて、皆さんにお話を聞いていただきたいのですが、今の「えん」の小島さんの話で、ほとんど尽きるような状態だと思うのですが、ここにご出席のお客様は、福祉関係の方、どのくらい居られますか？意外に少ないですね。はい。あとグループリビングに興味がある方？はいはい。私は建築家なんですが、建設業関係の方は居られませんか？あー残念ですね。建設業関係の方でこの不況の業界をなんとか切り抜けていかなければという方に、とても参考になるお話をさせていだきたく思う所です。なんていうのでしょうか、免罪符みたいなところがありますので、そのへんの関係もちょっとお話に加えさせていただいて、お話しします。

Z(i)G

じゅげむ館きたみ

1) 『じゅげむ館きたみ』の生立ち

NPO法人 Z(i)G 在宅支援技術者連絡協議会

高齢者の居宅自立生活の支援を目的：住宅建設業者集団

活動

- 住宅のバリアフリー化推進
- 介護保険による住宅改修推進
- 介護保険・福祉関係者への住宅改修の研修 (WS)
- グループリビングの研修

関係者との連帯
・情報の共有

高齢者居住安定化モデル事業 (国交省) への提案

1. グループリビング提唱
2. 既存建築物 (まちなか) の再利用
3. 高齢者の社会参加

じゅげむ館きたみの生い立ちからお話させていただきます。

高齢者の居宅自立生活の支援を目的とする建設業者のグループを作りました。この組織は具体的にはなにをするのかというと、自宅でそのまま、例えば「少し足に不自由を感じる状況だけど、自立した生活を続けたいな！」という人たちに、建築屋としてどのようなお手伝いをしてあげられるのだろうか？

その様なことを考え追求する為のグループを造りました。それでこの組織が全道的な組織なのですが、会員数が約 150 人くらいになります。日々の活動のなかにですね、いろいろな活動ありますが、第一に、既存住宅はもちろん新築住宅のバリアフリー化。先ほどの小島さんの話にもありましたように、日本の在来住宅には構造的な段差が大変多いのが現状です。最近の住宅（公的建築物も含めて）は行政側の指導のもとに、バリアフリーの住宅が増えては来ているのですが、以前に建築された住宅、既存住宅に関してはどのようにバリアフリー化の推進を図ったら良いのだろうか？

平成 12 年度に介護保険制度が成立施行しまして、いよいよ高齢化時代が来たということで、従来の様な施設等を受け皿にする大変な予算の掛かる施設型から在宅型へと方向転換、つまり予算がないわけで、なるべく今まで住み続けてきたところ、住宅で生活を続けていたいただきたいということで、介護保険の制度の中に、要支援の段階では、あくまで住宅で、なんとか頑張ってくださいと。そのために何が必要なのかって言うと、住宅改修バリアフリー化。住宅改修するのは住宅の中で、先ほど言った、段差、例えばドアの下にあった敷居が夜トイレに行くときに引っかかって転んだとか、そういうバリアになる箇所を改修していくようなことですが、その様なことに関して、いろいろな形で、住宅改修の技術検査・研修、技術を自分たちでなんとかして学ぶ勉強会・研修会を催してきました。

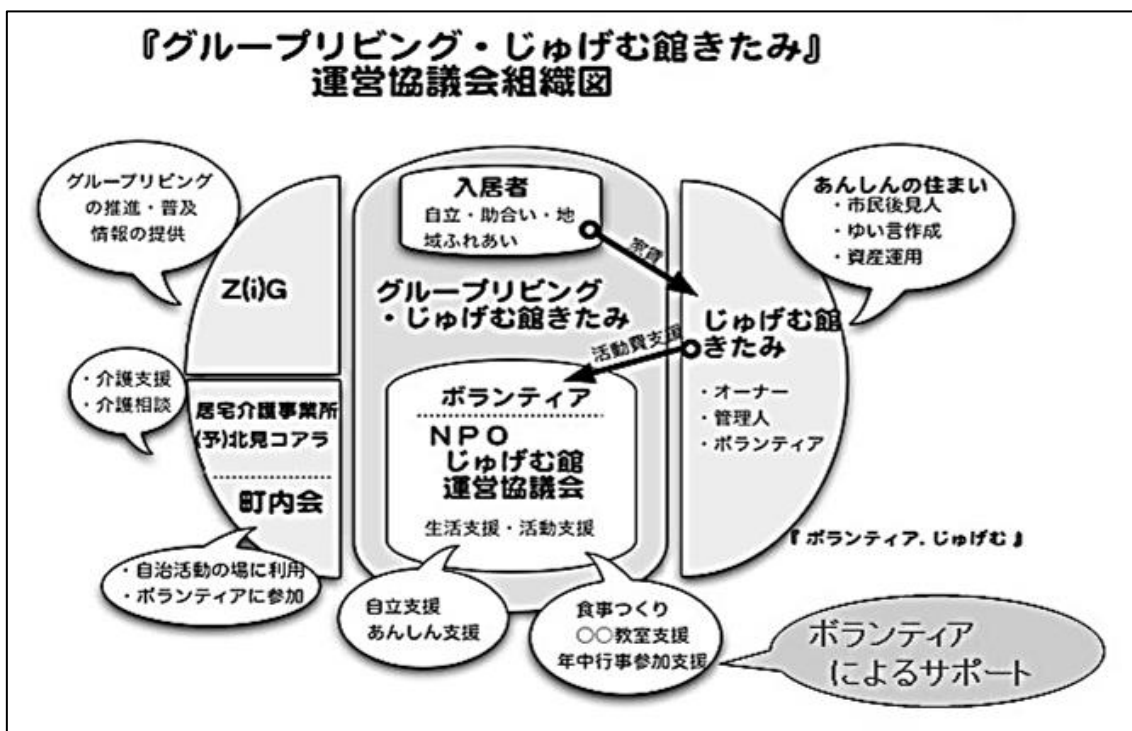
第二に、介護福祉関係者・医療関係者との住宅改修の研修会。いろいろ日々勉強したものですから、介護関係だとか福祉関係の方に、在宅の段階で、例えば介護保険制度の住宅改修っていう時に、どういう手助けがいいのだろうか？例えば手摺をつけるにしても、どのように取り付けると、利用者さんにとっては都合がいいのか？ということに関して、僕たちが主催して、介護関係、医療関係の方に勉強していただく、そういう日々の研修会も催すことができるようになりました。ひとつの大きな社会的資産になった要素です。現在いろいろなかたちで、私が今までやってきた建設関係のネットワークじゃない別世界のネットワークを作ることができました。そんな中、西條先生が企画実行されてた、COCO 湘南台のグループリビングというものが、私たちのところに、ある意味では先進事例的な、情報として入ってきました。そのへんを踏まえうえて、地元で培った社会的資産も手にすることが出来ました。

第三にグループリビング（高齢者共生住宅）を運営して行くとき、その他になにが足りないのだろうと考えるとき器なんですね。器・施設設備とていうのは大変な資金を必要とします。

先ほどの運営協議会のみなさんの中のグループリビングを運営されている方は、潤沢な、という言葉を使っていましたが、私達には一切資金がありませんでした。そこでどうしたかということ、私達の地域でもどこの地方都市でもおんなじなのかもしれませんが過疎化が進みまして、そんな中、某大学の分校が廃校・企業が閉鎖になり、そうするとその大学の学生さん・従業員向けのアパート・マンションなど、そういう建築設備が余ってくる状況

ですね。でたまたま私どもでは、北海学園大学の北見校が廃校になりまして、そこの近郊にあったアパートが、アパートといってもかなり大きな、50室くらいあったアパートです。そこが、空いてたもんですから、それでオーナーに相談しました。実は高齢者の住宅（高専賃）でこういう趣向でなんとか運営するような物件を探している状況で、ただ私達自身にはお金がないので、こういう形に改修して欲しい。大学生の部屋なら6畳ひとまくらいの小さな部屋でした。それを3戸繋げて1戸にする。そういう形の改修を希望したのですが、オーナーからはなかなか良い返事がいただけない状況でした。そんな時ちょっと面白い情報を手に入れることができました。『高齢者居住安定化モデル事業』（高齢者・障害者・子育て世帯居住安定化推進事業）これは国交省が募集した補助事業なんですけど、これは平成21年度に発表になりまして、その中で、これはどのような内容なのかということ、高齢期時代に対して、高齢者向けの既存の住宅等をどのようにリノベーション（改修）することによって、高齢者向けの住宅を安定的に供給できるか。また、この社会背景の一つとしてはですね、「アパートで亡くなってから3ヶ月も気づかれなかった。」というようなお話がテレビのニュースに時々出てくるような背景がありました。で、高齢者住宅難民なんて言葉もその時に生まれたのだと思うのですが、そんな状況の中で、住まい慣れた既存住宅（自宅）をなんとか改修して住まい続けていけるような、「リノベーション及び住まい方のシステム」**高齢者等**の居住の安定確保及び健康の維持・増進に資する事業その提案にちょっと国交省の方では興味を示してもらうことができました。ちょうど私達は設備がかなり古かったものですから工事費の3分の2を助成して頂き、約3000万円くらいの工事だったんですが、2000万円国交省の方から補助がつかしました。それを持ってオーナーに提案し、地元でグループリビングという言葉を使っていた高齢者向けの高齢者専用賃貸住宅を運営していた人が、うまくは行ってなかったみたいなんですけど、そういうことにすごく興味を持っての方がいたので、私ども、通称ジグ（Z(i)G）在宅支援技術者連絡協議会が提案して、オーナーとそれと、運営にすごく意欲的なグループと、この3者で共同提案することになり、それが採択されました。これが平成22年度には確か高齢者の後ろに高齢者等ってついたんです。高齢者など、子育て時代の人たちも対象にした居住安定化推進事業へとか対象を広げる事が国交省の主旨だと思うんですが。そういうこともあって、補助事業の名称が変わりましたが内容は変わりません。たしか私どもが平成22年度第2回の当選だったんです。北海道で初めて提案が認められまして実現したのですが、補助金をもらってそれで終わってということではなくて、国交省としてはそこに投資したからにはそれなりの結果、費用対効果みたいなものをのぞむですね。それで10年間報告義務があるということで、毎年8月には大変な思いをして報告書を作っています。

その提案（「リノベーション及び住まい方のシステム」**高齢者等**の居住の安定確保及び健康の維持・増進に資する事業）のなかにですね、運営に関係してこんな組織図をイメージして作って見たのです。



やはり本人（※高齢者）が自覚して、その気（※自由に自分らしく）になって入居してくれないとだめですね。基本的には誰かがそう決めた、誰かさんに入れられた、という形で入居された方は長続きしないですね。ですから自分たちで自ら自分らしく暮らす・活動するのだという自覚が必要ですね。グループリビングじゅげむ館きたみの運営協議会（自治会）を、住んでいる人自ら組織して、自分たちの要求するものを意見統一してそこで組み立て、それを私達運営する側の人間との間で話し合っ、統一見解を出しています。これを月1回のペースで開き活動しています。

一月ほど前のことでしたか、入居者にずいぶん出たり入ったりがあったのですが、実はつい最近男性の方が入って

Z(i)G

じゅげむ館きたみ

3)『じゅげむ館きたみ』のいま

じゅげむ館は「自立と共生」を目指すグループリビングスタイルの新しい住まいです。
 じゅげむ館の住み人は、お互いに支え合い、励まし合っ、いつも笑顔で仲良く暮らしましょう。
 また、共用空間は広く地域社会にも解放し、地域の人たちとも仲良く交流して行きましょう。
 じゅげむ館の住み人は、次の五つのことを据えて行動するように心がけていきましょう。

きたのです。若い方で65歳くらいだったんですが、この方が非常に真面目な方で、要求することは確かに正しいことなんです。例えばですよ、共同の食堂にあるボックスステイッシュを異常に使う女性がいます。小さい話なんです。それがものすごく気になるのですね。ですからその様なときは、例えば「汗をふくのであ

ればハンカチだとか、鼻をかみたい時は自分のティッシュを持ってくればいいじゃない。自分のものを使って、みんなの顔を伺いながら生活することないじゃない！」ってことをその人に言ったですね。そうすと、周りの人はいいじゃない今までそれ認めてたんだから、あなたが入って来てあなたが今気づいたからって、今まであった習慣だとかルールをあなた1人の意見で変えることはないじゃないかっていう話が持ち上がりました。その男性対、それまで住んでいた人っていう構図が出来上がって、いろいろもめたのです。

その時ちょうど僕が居合わせて、「いや食堂で残りのそのほかの人たちが集まって、いろいろ相談しているんですよ。そしてあの困ったのだと、実はこんなことまでいう人がいるのってそういう話があったんです。」僕は即座に「素晴らしいことだね」って言ったのですよ。この素晴らしいっていうのは、今までは、なにか起きた時にみんなで集まって相談するってことがなかったんですね。そんなことが目の前で起きたものですから、「いやすごいじゃない」って、「僕（運営する側）なんか手を離して住もうみんなで真のグループリビングの運営をして行ったらどう？」っていうくらい素晴らしいことだと僕は思うのですね。些細なことかもしれませんが、そんなことがつい最近見られました。

じゅげむ館の特徴である、食事は毎日朝昼晩と3食付きます。「付きます」って言葉はちょっといけないのですが皆で作って食べてます。住んでる人が自ら皆で作ってます。ただこの時に全員ができるかどうかと言うと、ちょっと問題があります。食事作りが嫌だ、できないからといって入居された方もいます。この人たちは決して**強要されないでそこで食事を取**ることができます。その代わりに、私昔主婦だったから、私作るの好きだからっていう女性が何人かいました。そういう人たちに食事作りをある一面をおまかせして、最終的な責任を取る役目の人間っていうのはやはり必要ですから、ボランティアさんがおります。ボランティアさんが今7人おりますが、一食事に必ず1人のボランティアさんがついて、食事を皆さんに責任を持って用意しています。この3度の食事っていうのはいろいろグループリビングのやり方の中にあると思うのですが、皆さんと相談した結果、3度作る、3度食べたいという圧倒的な意見でそういう形になりました。ですけれどもこれは決してそんな事がどこでも通用するということではなくて、たまたま「じゅげむ館きたみ」ではそういう運営の仕方をしています。

『最終的には、できる人がやればいいんですよ、できない人は無理することないですよ。できない人に無理強いする必要は無いんだよ』っていうことです。

じゅげむ館きたみ住民憲章

- ◎できる人がやりましょう。身体的にできない人は無理はさけましょう。
- ◎できない人に強要はやめましょう。
- ◎できる人の邪魔をしないようにしましょう。
- ◎どんなに努力をしても、他人を全て理解することはできません。
だから、他人のことを、先ず認め合うように努力しましょう。
- ◎見栄を張らず、背伸びをせず、無理をしないで、家族として気楽に住み続けましょう。




これはですね、北海道新聞なのですが、去年、『年忘れの食事会』これは親族の方だとか、お友達だとか、そういう方に声をかけて集まっていたいて、みなさんがこの様な生活をしてますよ。って言う年に1度の大きな報告会です。

そちらがですね、小樽の「高齢者グループついのすみか」、自分たちで作ったということなのですが、これも街中にある未使用の建物をみんなで買って、そして共同で再

利用しようと言って作ったグループリビングですね。形は決してグループリビングが先にあってそれに合う形で建物を作ろう、これはもう全く資金的に、こういうふうに先ほどの言葉じゃないですけど潤沢に資金がある方には可能なんでしょうけど、決してそうじゃなくても、可能だと思うのですね。ですから、先ほど建築屋さんが云々って話をしましたが、建築屋さんなんか掘り起こして、街の中で空いている建物を再利用していただく。そういう形でもこれから商売に生かせるのかなという気はしますね。そんなところですね。何か取留めの無い話になりましたが、本当に素晴らしい住み方だと思います。「自分も入りたいな！暮らしたいなあ！」と思っている形に近づけていけているのだらうと感じています。僕もなんとかまだ家内と一緒に生活していますが、そのうちに間違えなく一人になる時がやってくると思います。ご静聴ありがとうございました。

Z(i)G



じゅげむ館きたみ

『NPOじゅげむ館きたみ』

運営協議会の望むこと

高齢者専用賃貸住宅（高専賃）今後！？

- 高専賃の現状・将来
付加サービス「介護支援」 → 付加サービス「自立支援」
- 社会参加型のグループリビング
高齢者 = 支えられる立場 → 高齢者自身も支える立場
参加する = 地域社会活動参加
※若者世代・世帯への支援も可か？
- 「まちなか居住」：再開発対象地域（社会資産）の改修による再生

講演 3 「生協活動とグループリビング」

生活クラブやまがた生活協同組合 常務理事 松本由美子氏

あらためて、みなさんこんにちは。たくさんいつも見慣れたお顔の方と、昨日福島から一緒にさせていただいた方と、こんなにたくさん来ていただいてありがとうございます。今日、先ほど中村さんが手あげてくださるようになってましたよね。福祉関係の方とかね、いろいろ。びっくりしたんじゃないでしょうか。実は 3 日前に人数が足りないからもうちょっと集めなければということで、この言葉がふさわしいかどうかですが、動員かけられておいでになった方たくさんいらっしゃると思うんです。ただ聞けばいい、聞いてくれればいいからっておいでになった方、いると思います。私の話が終わったら、ワークショップっていうのがあって、グループ分けがあると思います。その中でなんかしゃべんなきゃいけないかなーって思ったり、それから受付で突然グループのリーダーを指名された方もいると思いますので、いつものように騙されたと思ってご参加いただいてありがとうございます。

時間が多分おしてますので、簡単にお話をしたいと思います。私たちは、生活クラブやまがたで助け合いの活動をしながら今日に至っておりますので、その経過を少しお話したいと思います。生活クラブやまがたは 52 年の歴史があります。1990 年代にこの生協を作った組合員の高齢化が非常に目立つようになってきました、1994 年一人の組合員の「助けて!」、「助けて!」っていうのは同じ理事の仲間だったんですが、私理事をやめなきゃいけないと。今日受付で頑張ってくれてた方なんですけど、「何で?」って聞いたら、うちの母が認知症になって、理事の活動どころじゃないということだったんですね。それではあなたが理事を続けられるために、皆でできることをやろうと思って始めたのが、「たくろう所」です。助け合いの会という会を組織しまして、有償のボランティアでたくろう所を始めました。たった一人の、「助けて!」、という声を形にしたのが、私達の現在に至る第一歩でした。

合言葉はたすけられ上手になろうということです。非常に耳慣れない言葉だと思いますけど、助けるという言葉が行ったり来たりすることが助け合いであって、助けることが一方的にいくのが助け合いではないということです。これはちょっと技術がいるんですね。助けてもらうことを上手にするということは、先ほどからいろんなお話があるなかで、自立という言葉が出てきてますけど、ほんとに気持ちも、体は誰かのお世話にならなければならぬということはあるかもしれませんが、気持ちはいつまでも自立をしていないと、助けてもらうことは、なかなか難しいんじゃないかなと思います。助けられ上手になろうという合言葉を言いながら、たくろう所の活動を続けてまいりました。仮住まいから一戸建て、短期長期の宿泊利用など、病院の相談室や、市の高齢福祉課、社会福祉協議会、一般市民の方々と相談はあとを経たずに行きました。いろんな方からご相談をいただいたときに、できるかどうかはみんなで相談をしました。たいていはやってみないとわからないというこの一言でした。たいていのケースはお引き受けして、やりこなしてきたのが実態だと思います。

2000 年の介護保険制度のスタートは静観しました。あまりよく勉強していなかったのも、よくわからなかったというのが実情です。しかし、認知症の方がだいぶ増えてまいりまし

た。2002年、今までの経験、仲間の生活クラブの後押し、行政からのアドバイスをいただきながら、介護保険事業に着手することを決定しました。組合による福祉委員会を設立して、自分たちの受けたい介護、暮らしたい場所について話し合い、2004年2月認知症対応型グループホーム結いのきを開所しました。福祉委員会は結いのきを支える会として市民参加型福祉をさらに進めていくことになりました。本日みなさんの受付をしていただいていたメンバーは支える会のメンバーです。生協というところは非常にめんどくさい組織でして、誰かが、例えば理事長がやりますよって言って決められるものではありません。組合員の合意というものが必要でして、福祉事業をやるといふ時に、非常に反対もありました。私の出資金を福祉事業なんかに使ってくれるなと言う方も何人かいました。その後その方のお母さんを面倒見たという実態もありましたけど、非常に合意形成に時間のかかるところです。たたくろ所は活動はそのまま継続して、行っていました。

介護保険制度がスタートした2000年はたたくろ所の利用者も非常に少なくなったんですが、高齢化の波はそれを上回るもので、施設待ちの相談や、介護保険サービスの併用利用が非常に多かったですね。たたくろ所は手詰まりになり、多くの希望を叶えることは難しいという現実がありました。介護保険法の改正により、たたくろ所は看護師の配置義務とかプリンクラーの設置義務が言われるようになり、これ以上のたたくろ所を作ることは難しいということは認識していました。少しだけ、もうちょっと広い何かをつくりたいなあと、思ったことと、グループホームだけでは介護保険事業行き詰まりがあるということで、デイサービスも作りたいなあとという思いでいました。

組合委員による第二次福祉委員会を設立し、たたくろ所が無理ならば、その当時に西條節子さんのお話を米沢で私は聞くチャンスに恵まれました。小島さんもそうだったようですけれど、私も非常に感銘をうけて、作るならこれだなと思ったことを、すごく鮮明に記憶しております。西條さんのお話のグループリビングの考え方は非常に私たちが思う活動に合致しているなと思いました。それと併設でデイサービスを考えて、研修を重ねたわけですけど、生協法人でそのままやるという方法もあったんですが、先ほど言いましたように合意形成に非常に時間がかかる、合意をしてしまうと組合員の方は非常に積極的に能動的に活動して下さるので助かるのですが、いろんなことを決めていくときに手続きにすごく時間がかかるので、NPO法人を設立することに致しました。

で2007年にNPO法人結いのきを設立し、2008年1月意志ある組合委員によるワーカーズ Man-ma (マンマ) を設立致しました(2009年にNPO法人を取得しております)。本日福島からの皆さんと、生活クラブの組合員若干名の方、施設をご見学いただいた後に、お食事を食べていただきましたが、ワーカーズ Man-ma (マンマ) の手作りによるお食事を食べていただいたところです。2008年9月にデイサービスセンター結のきを開所し、2009年3月、今みなさんのお話で話題になっているグループリビング COCO 結いのき・花沢を開所致しました。たまたま、グループリビングを建てようと思ったわけではなく、14人の自立型のところを建てようということで、設計もあらかた済み、デイサービスと併設で建てようというふうに思っていたところに、先ほどからいろんな方のお話の中に出てきますように、JKA 自転車振興会の助成金のお話を、私の目の前にいらっしゃる大江先生から頂戴しまして、すぐにのりました。お金が無かったので。そして設計を変更し、10の方が住めるグループリビング、そしてデイサービスとは切り離れた建物に設計を変更しまして、

建てさせていただきました。

現在、グループリビングは60歳代の方が2名、男女比1名ずつです。70歳代が2名、男女比1名ずつです。80歳代が4名、男性1女性3です。90歳代が3名、女性2男性1、全員で11名の方が入居なさっています。10室ですが、ゲストルームを作っておりますので、そちらも今お入りいただいて、11名の方にご入居いただいています。で、要介護の方が2人おられます。要支援の方が1名。先ほどお話にもありましたが、グループホームがありますので、お入りいただいている中では、この6年間の間に、7名の方がグループホームの方にお移りいただいているということがあります。いろいろな方がグループホームの入居のご相談に見えるんですけど、残念ながら、空く時がなく、だいたい2年待ちくらいの現状ですので、お話を伺って大丈夫そうな方は、グループリビングにお入りいただいて、空いたらグループホームに入らせていただくというようなことをさせていただいております。今までで、他県からおいでになってグループリビングにお入りいただいた方は2名、他の市町村からは2名、というような現状があります。

さて、現在に至るまでの間に、震災のお話もみなさんからありましたが、2011年3月11日、東日本大震災以降ですね、グループホームもグループリビングもデイサービスも、福島からの避難者の方、もしくは支援のボランティアの方々の拠点として、3施設は有効に動いていると思います。特に福島からの避難者の方の住まいになったり、ボランティアの方の宿泊所になったりとかですね、かなりそういった意味では拠点として米沢市と連携できたかどうかわかりませんが、現在も避難者の方の支援をさせていただいておりますので、後ほどワークショップのときにみなさんお話を一緒に聞いていただければと思います。

2014年11月現在、生活クラブの福祉事業と、NPO法人結いのきの福祉事業、結いのきグループを支える会、それからワーカーズMan・ma（マンマ）、それぞれ4つの団体が有機的に結びついて、地域福祉を作り続けていると自負しておりますが、まだまだ地域で人が人を支えきるという仕組みがありませんので、今後はそこら辺のところをもう少し掘り下げて、仕組み作りをしながら、横のつながりを作っていけたらと思っております。ありがとうございました。

福島・米沢ワークショップ

生協活動とグループリビング

生活クラブやまがた生活協同組合 常務理事 松本 由美子

- 生活クラブやまがたは今年設立52年目を迎えた。1990年代 この生協を作った組合員の高齢化が目立つようになってきた。1994年一人の組合員の『助けて』の声を実現するために、『たろう所』を始める。組合員の有志が集まり、『助け合いの会』を発足。有償のボランティアでおばあちゃんの面倒を見る事からスタート。合言葉は『助けられ上手になろう』 仮住まいから一戸建てへ。毎日の通所・時々の通所・短期・長期の宿泊利用等・病院の相談室、市の高齢福祉課・社会福祉協議会・一般市民の方々々と相談は後を絶たなかった。
- 2000年の介護保険制度のスタートは静観。
- 2002年 今までの経験・仲間の生活クラブの後押し・行政からのアドバイスをいただき、介護保険事業に着手する事を決定。組合員による福祉委員会を設立した。自分達の受けた介護、暮らしたい場所について話し合い、2004年2月、認知症対応型グループホーム『結いのき』を開所。福祉委員会は『結いのきを支える会』として市民参加型福祉を更に深めていく事になる。
- たろう所の活動は継続して行っていた。介護保険制度がスタートした2000年はたろう所の利用者も少なくなったが、高齢化の波はそれを上回るもので、施設待ちの相談や、介護保険サービスとの併用利用が多くなった。たろう所は手狭になり、多くの希望を叶える事は難しかった。介護保険法の改正により、先行き看護師の配置義務やスプリンクラーの設置義務などの指導が入るようになった。少しだけ広いたらう所に代わるようなものが欲しいと思うようになった。
- 組合員による第二次福祉委員会を設立 たらう所が無理なら・・・米沢市内で聞いた西條節子さんのお話の『グループリビング』の考え方は私達が思う活動に合致している。それと、併設でデイサービスを。と考え、研修を重ねた。
- 2007年 NPO 法人結いのきを設立
2008年1月 意志ある組合員による、ワーカーズ Man・ma を設立(2009年 NPO を取得)
2008年9月 デイサービスセンター結いのきを開所(30人定員) 2009年 3 月グループリビング COCO 結いのき・花沢を開所
- 2010年3月 16年間に及ぶたらう所はその役割を果たし、次にその活動を繋げる事ができた。その判断により、閉所。長い間たらう所活動を担ってきた助け合いの会メンバーはグループリビングの家事全般を担う事になった。
- 2011年3月11日東日本大震災以降、福島からの避難者の支援活動の拠点として、結いのきグループ福祉事業所を開放している。現在も自主避難者のための生活支援活動を継続している。
- 2014年 11 月現在 生活クラブ福祉事業と NPO 結いのき福祉事業・結いのきグループを支える会・NPO ワーカーズ Man・ma は、それぞれが有機的に結びつきながら、地域福祉を作り続けている。今後ますます進む少子高齢化の中で地域で人が人を支えきる仕組み作りと実践を継続していきたい。

ワークショップ

司会	神戸女子大学	家政学部	教授	上野勝代氏
講師	NPO 法人 暮らしネット・えん		代表理事	小島美里氏
	NPO 法人 じゅげむ館きたみ		理事長	中村雅充氏
	生活クラブやまがた生活協同組合		常務理事	松本由美子氏

[上野（敬称略・神戸女子大学）]

どうもみなさまこんにちは。この米沢にこさせていただいて、大変私嬉しく思っております。私は昨年、米沢に来ました。上杉鷹山先生の教えをかの内村鑑三先生が代表的日本人ということで、英文で著述し諸外国に紹介された本を読み、ケネディ元大統領や、ビル・クリントン大統領らが尊敬されている一人として、上杉鷹山先生のことを聞いたので、私もよく知らなかったものですから、上杉鷹山先生とはどんな人だったのかを知りたくて、家族でこの地を訪れ、ずいぶん感銘をうけました。その地でこういうふうにも、皆様方にお会いできて、大変嬉しく思っております。今日はこれからワークショップを進めていきますが、なにしろ私は歳をとっていますが、こういうことをするのは珍しいものですから、どうか皆様ご協力のほどよろしく願いいたします。

はい、ワークショップといったら、もしかしたら横文字で大変なことと思われるかもしれませんが、一番の目的は皆様方がお互いに、初めに自己紹介をして、お互いが話し合っ
て仲良くなって進めることです。テーマは、さきほど報告者の方の話をそれぞれお聞きになったことと思いますが、まだまだわからないことがいっぱいあったと思うんです。そこで各グループで、報告者の方に、お聞きしたいことはなんだろうということを3つほど、グループ毎にまとめていただけないでしょうか。ところで、今日の報告者の方の報告を聞きながら、私もわからないことが共通してあるなと思いました。それぞれの方ができた経緯についてはよくお話いただいたし、それぞれの特徴も言われたのですが、具体的に1室の広さがどれぐらいの広さで、生活費がどの位かかっているのかなどが、わからない方もいらっしゃるんじゃないかと思いますので、はじめに、そのあたりを1人ずつ聞いて、そしてワークショップに入りたいと思いますのでよろしいでしょうか？

[小島（NPO 法人 暮らしネット・えん）]

そのへん一番ご興味があるところだと思うんですが、先ほどのDVDの中でもちょっとご紹介があったんですが、初動に300万円をいただいておきます。ただしこれは1ヶ月ごとに2万5千円ずつ落ちていきます。前家賃のような格好です。本来ならばそれに毎月2万5千円ずつ上乗せしてもいいんですけど、建設経費、そのほかの補填ということもありまして、1年でもし退居なさるときは、30万円を引いて、お返しをしております。私どもの場合は、はいられた年齢が非常に若い方が結構多かったものですから、これが10年で消えてしまったときに、預かり金がなくなってしまうと、退去時の経費がなくなるというのはまずいということで、敷金を2ヶ月いただきまして、これを退去時の費用に当てさせていただいて、300万円の方はクリアに何ヶ月いらしたかでもって引いてお返しするという形にしました。それが最初のところで、合わせて314万円を初動のときにいただいて、月々が家賃が7万円、食費が1万8千円、うちの場合夕食だけです。共益費、この中に水道代、ガ

ス代、共同の電気代も入っています。あと家政委託費としてこれは、共有空間のお掃除ですとか、様々なメンテナンスで2万円ずついただいています。「電気が切れちゃったのでお願い」とか、「テレビがつかないからお願い」とか、いろんなことで私ども隣にいると呼び出されまして、たいていスイッチが入ってないとかいうことが多くて、その程度です。んですけど、隣にいるものですから、9時～6時くらいの間だったら必ず飛んでいけるということでその分も入っております。それが毎月決まっていた分です。あとお部屋の電気代なんですが、メーターをつけてその分をいただいています。これはやっぱりおうちにいる時間の長い人短い人いらっしゃいまして、毎月いただくお金も倍以上違っちゃいますね。節約される方は数千円の範囲ですし、冬とか夏とかでエアコンばんばん使う人は結構使う。ちなみにお部屋には床暖房がついていますから、冬なんかでも暖かくできて、その電気代もお使いになるかということもあります。あと、共同の洗濯機と持ち込みの洗濯機どちらを使ってもいいということにしてるんですが、共同の洗濯機を使う場合は100円をいただいています。なるべく公平にいくように、つまらないことで人間っていがみあうもんよってこれも西城さんに教えていただいたんですけど、あの人ばかり電気がんがん使ってるとかね、あの人ばかり洗濯毎日してるとかいう事になるから、クリアにきちっとしたほうがいいということで。そこまでで12万8000円かかっていますね。あと電話代ですとか、テレビとか新聞とか、ご自分の朝昼の食事代ですとかその他いろいろでもって、1人の方に1ヶ月どれくらいかかるの？ということで試算をしていただきました。だいたい17万7000円というふうにおっしゃっています。旅行にも行ってらっしゃるんですが、それを含めて毎月20万かからないぐらいかなと言っています。

「こんな高いところに私は入れないわ」という方が結構いらっしゃるんですが、どうも自分の家の家賃のことはタダだと思ってらっしゃるんですね。埼玉県とはいえ、都県境で、電車で池袋まで20分ですので、みなさんの住んでいるおうちは家賃7万円のおうちではないんです。3LDK以上ぐらいの結構立派なおうちに住んでいる方が多いので、貸したり売ったりしてきたら、ここの経費は出ます。あとの経費5万8000円は年金があれば、確かに中間所得層ではありますが、そんなに厳しい額ではないと思っていますし、私自身も将来入れる額なのかなということでも組み立てました。またなにかありましたら質問ください

[中村 (NPO 法人 じゅげむ館きたみ)]

今の埼玉のお話と比較すると、ずいぶんお安くできていると思うのですが、基本的に月額10万9000円で、内訳は、家賃が3万円、食材費が3万円、共用費が2万円、家政費が1万7000円、個室についている暖房・電気代で1万2000円、あと、住み人の会と言う住民の運営協議会の中での組織の会費として、自治会費が月額1000円、ここまでが定額になります。今の1000円を足すと11万円、で止まります。ただ入居時にですね、先ほど設立時の予算内訳のお話をしましたけど、3000万円の工事費がかかったのですが、そのうち2000万円の補助金しかいただけていないので、1000万円という予算をどっかから捻出しなければなりません。それで入居時に、25万円の負担金をいただいています。これは私どもの方は10年間で償却する方式で、年間2万5000円ずつ償却させていただいています。もちろん1年目で退去すれば、2万5000円引いた差額をお返しすると、そんな形でやりますので、もろもろは病院代だとかもかかりますが、私どもで標準的にここに住んでいる

人の金額を計算すると、14万5000円くらいになります。このくらいでほしい収まっている状況だと思います。部屋の大きさはですね、先ほど言いましたように、改修前の6畳間3室を上手に改修しています。10畳間を2室で1戸にしました。ひとつは居間・寝室、もうひとつは台所・洗面所・トイレ・洗濯機置き場となっています。ですから小さなマンションです。これらの水周りを除いて残りスペースが6畳。給水給湯設備が4畳分使っています。ですから、1戸でいうと20畳(32.4平米)ですから、大きい方ですよ。もう一種類(2人用)はですね、居間・寝室部分が11畳あるところも用意してありますので、ご夫婦で生活することも可能です。そんな部屋を3戸用意してあります。建物全体で24戸ありますが、それで全体のバランスから言いますと、24室全部オーナーから借り受けてしまうと、運営できなくなってしまいますので、オーナーに要望して、入居実数だけしか私どもは借り受けておりません。ですからなんとか運営が成り立っています。家賃3万円です。考えられないですよ。自宅を維持するだけでも月3万円位の経費は掛かりますから。そういう意味では、利益があがるような、そんな仕組みの運営の仕方ではありません。私達の地方では高齢者の所得としては、主に中・低所得の方が多く、入居費・生活費として使える収入としては、強いて言えば国民年金、そして自宅、お父さんが残してくれた住宅があるからその家賃収入、ないしは自宅を処分した一時所得・預貯金などです。そういう経済状況で住んでいる方がほとんどです。

[松本(生活クラブやまがた生活協働組合)]

それでは結いのきのご説明をします。基本的には家賃、光熱費、食材費、家政委託費、含めて、14万2500円です。これが入居一時金が50万の場合となります。入居一時金が300万の場合は月々が13万円、この差額の1万2500円を20年間で償還するという形です。ご入居の年齢は60歳からお入りいただけるというふうに作りましたので、長い寿命ですので、20年間で償還すると80歳ということ。一時金を50万にするか300万にするかはお選びいただけるというやり方です。それぞれいろんなやり方あると思うんですが、特に電気料金については、今日見学していただいた方はお分かりかと思いますが、個メーターはつけておりますが、現在個メーターで計算はしておりません。一律で同じ料金にしております。先ほど小島さんがおっしゃったような、つまらないことで、ということで、先行きあるかもしれないということを予測して、一応、個メーターはつけてありますが、現在個メーターで計算はしておりません。

[上野]

ありがとうございました。それではこれから各テーブル毎に、先ほどの報告と今の報告を含めまして、もっとお聞きしたいというようなことを、各テーブルで話あっていただきたいと思います。ちょっと時間がおしておりますので、ほしい15分ということでどうでしょうか？よろしくお願ひいたします。まず初めに、お互い知り合うために、自己紹介ぐらいからいかがでしょうか？

(各グループで話し合い)

[A グループ]

生活クラブ山形の高橋です。先ほど言いましたが突然今日振られて、こういう発表をしろということでしたので、非常に抽象的な方向になるかと思えますけど、ひとつは、それぞれの施設またはNPO 結いのき、ちょうど米沢の方からの質問でしたけど、入居の際どんな事を基準に、入居の優先順位をつけられるのか。今ゲストルームも含め、11 部屋あるわけですけども、そこが満室の場合に、例えば 3 人入居希望があった、違うな、例えば 7 部屋くらいあったとして、10 人、入居希望があったときに、どのような振り分けをするのか、ということですね。なかではケースバイケース、その個人個人の事情になるのではないかという話も出ましたが、あらためて、お聞きしたいです。

あとは、グループリビングのような知名度がやっぱり無いんだと思うんです。グループリビングで住まうという選択を取る人は少ないわけですけど、どういう人が選択されているのか教えていただきたいです。

最後に私の質問ですが、グループリビングという暮らし方は高齢化社会における、いつまでも自立した生活を、最後まで自分らしくという暮らしを求められている、今の社会情勢の中で必要な、みんなが欲するような生活のありようだと思うんですけど、この三施設で、ますます 2050 年くらいまではご高齢の方が多くなっていく中で、今後の事業や取り組みの展望をお聞かせください。

[B グループ]

わたくしどもの方のメンバーは、今デイサービスの方でお仕事されている方、実際グループリビングに入居されている方、一般の地元の方などの構成ですが、その中で 2 つほどテーマがございました。

やはり一般の方は今の社会保障、年金制度ですけども、年金額が、今の年金額よりは下がってしまうだろうということで、先行きが心配で、先ほど提示された金額が悩ましいということです。その場合、ご自宅の方を売却したり、お貸ししたり、そういうアドバイスはどこに相談したらよいのでしょうか。

あとは、今の生活を継続させるにあたって、やはり最期の看取り、ターミナルまでやっていただけるサービスがなかなか地域にない、たぶん今日おいでのみなさんも、ほとんどの方は自宅で迎えたいと思うんですね。そういったサービスについての不安っていうのも、グループリビングに入るとはまた真逆の選択、自宅で迎えるというね、テーマについてもご意見の方をいただきました。

[C グループ]

C は 5 人の中の半数以上が騙されて今日ここに来ました。最後、どうしたらいいかの質問なんですけど、自分の家売って、リビングに入りましたと。入ったものの、合わないなとなったときに、その後どうしたらいいんだろうか？ちょっと不安だという意見が出てきました。

それから看取りという話が出ましたけど、認知症になってグループホームに移るということはあるんですが、病気になりまして、体もかなり弱った場合、その時はどうしたらいいのか、看取りはどうしたらいいのか、そういった質問がありました。

[D グループ]

私たちのグループは 5 名が地元米沢で、今日見学をさせていただいたときに感じたことだそうですが、3つの施設全て、みなさんの表情がとてもよかった、特にグループリビングに住んでいる方ですね。食事もいただいたときに、とっても嬉しかったというお話もありました。

2つめは、うちを売って入るといった場合、みなさんの中から、今現在の経営状態というふうな話というのは全然触れられていなかったようですが、例えば家を売ってまで行ったという事を考えると、不安がすごくあるということも出ました。

あと家賃ですけど、7万 5000円と 3万円ですぐにぶん差があるので、おそらく、7万 5000円は高いかなと、なんでそんなにあるのかなという質問も出ました。

[E グループ]

E班では、昨日から引き続いて参加していただいている福島福祉会の理事の方、それから、兵庫県の方でグループリビングを運営されている石原さん、それから、グループリビングで定年後まで従事されていた方と、ちょっとグループリビングに興味がある方、様々な方がいらっしゃいました。その中で出てきた質問は、ある程度、石原さんが答えていただきました。その中で出てきた議論としては、グループリビングの採算が今後とれていくのかどうか。それに対して、石原さんのお答えは、グループリビングで健康で 5年間過ごされたら、年間 1億円分社会保障費が減るんだと、それに対して本当は国の補助が欲しいと話されていました。

もう一つ出てきたのが、やはり経済面の問題で、グループリビングはとてもいいと思うんですけど、入居費がどこまで出せるのかという話です。先ほど家を売ったらという話が出たんですが、米沢の方で戸建てが 300万円で売りに出ているから、それだと厳しいかなという話の中で、300万円の戸建てを 2つ買って、新たなグループリビングを始めたらどうですかという話も出ました。

[F グループ]

Fグループです。私は福島の方でグループリビングを経営している者です。いろいろなご意見が出ました。私が回答できる限りは回答しましたが、やっぱり、グループリビングの諸費用、このお金だと、入れる人、入れない人がやっぱり別れてしまうという話が出ました。家を売るとしても、地方だと価格が違いますよね。決して高くはない。逆に、家を残してそのまま行った場合は、取り壊しのときに何百万も取られちゃうといった話も出ました。

あとグループリビングの中で、門限はどうなのか、あとは我々、団塊の世代が年を取ってくるに従って、核家族で片方がいなくなっちゃった場合は頼らざるを得ないんだけど、そのへんもどうするのかなあという意見も出ました。

[G グループ]

Gの井上でございます。Gは、それぞれのご家庭の事情の中で、ご高齢の方を抱えていらっしゃるという方たちでしたので、どちらかというとグループリビングも大事ですが、

グループホーム、特養、そういうところの利用のお話も出ました。今現在デイサービスを利用されている話も出ました。

グループリビングについては、自分が入るとい立場で、やはり、お金、お金、お金……。お金をどうするのか。融資制度があるのかどうか。あと、土地を売り払って入った場合、そこで最期を迎えることができるのか、不安があるとか、そういうご意見も出ました。それと新しくグループリビングを建てて、そこに入るとすると、今のそれぞれの3つのリビングのように入居料がかかるんでしょうけども、中古のアパートをリニューアルするという、新しい、提言を、してみようかと。お金の問題は、これから年金が下がるという問題と合わせて、大事なことだなと思っております。お金のこと、聞かれても困りますよね。

[H グループ]

H でございます。やはりあの、年々少なくなる年金で果たして入居生活が維持できるのかという事がやはり出ました。入居金がないということで、そこらへんのお金の問題ですよ。あとは来年の4月から生活困窮者自立支援法っていうのができるわけですが、ほんとに生活に困っている高齢者、ひとり暮らしの方、そういった方々が利用できる施設、いわゆるグループリビングではないという感触を得ているんですが、そこらへんがどうなるか。

あと、入居に関して、自由に自立するという考え方はあるんですが、入居者同士のコミュニケーションや、入居をして中には気が合わなかったり、若い人が施設の中で先輩にコキ使われているという入居者同士でのコミュニケーションの在り方や、そうしたような何かまずい事があったときに、経営者の中でどなたが、そういうふうな事に関してのリードを取りながら、うまく収めながら、プロデュースをしてくれる人がいるのか、そこらへんはどうなのかという話も出ました。各部屋、独立した居住空間がある中で、入居者同士のトラブルの解決方法を心配されている方もいました。

私個人としては、昔からシェアハウスというような、仲間同士が同居しながら生活するということが大変興味を持っています。子どもたちが自立していく中で、残された仲間がおりまして、どうやって一緒に暮らす方法があるかなと、いつも話し合っています。シェアハウスという考え方と、グループリビングという考え方が、どうリンクしてくるのか、私個人としては興味があります。

[I グループ]

Iの方では、ちょうど3つ質問が出ました。

前からグループリビングは知っていて、いろいろ見学に行っているという方からの質問ですが、入居者同士の苦情はどう対応しているのか。それぞれ、皆さんの所で違うと思うので、教えていただければと思います。

それと、2つめは、今日見学した人の話ですが、結いのきは、食事の時、入居者同士が和気あいあいとしていると伺った。お邪魔した時も、暖かく迎えてくれたと。どういう運営をすれば、そういう風に見えるのか、という質問がありました。

3つめは、自分は、遺族年金等で支払いできている。これ結いのきの入居者の方です。支払いできているが、知っている人から、「どのくらいお金かかるの？」と聞かれたときに、

請求明細書を見せているらしんですが、「高くて入れない」って言われたそうです。そういう人をどうしたらいいかという、以上3つの質問が出ました。

[Jグループ]

質問ってということではなかったんですが、民生委員をなさっている方から出たことで、地域を回っていると、施設に入っていれば安全で安心して暮らせるのだけでも、勧めるタイミング、その人が決断するのがどのへんなのかと。グループリビングみたいな所に行けば、周りの目もあって、安心安全に暮らせるのだけでも、なかなか自分で見つけれない現状もある。それから、どこで基準を決めるかということが問題なのかなと。自分自身に対しても、いつまでも自立したい、自分で暮らしたいっていう思いと、でも、最後はどうなるんだろうっていう思いのなかで、グループリビングに入るっていう決断がなかなか大変なことなんじゃないかという意見が出ました。

最後はふる里に帰りたいという願望もあり、グループリビングに入るという決断がなかなかできないという話も出ました。あとは、地元で生協活動に関わっている方、最初に肉親を生協で面倒見ると、みんなで支援していこうという方、運営に関わっている方、地元の食事作りをしている方、介護の親を抱えて、グループホームに入っている方、お弁当、見守りを利用している方、いろんな方がいましたけれど、理想的なグループリビングの住まい方ではありますが、なかなか経済的な問題とかも話が出ました。

[上野]

ありがとうございました。ずいぶん多くのところから、いろんな質問がありますね。まあ共通するところがありますので、これからそれぞれ3人の方に、多くを答えていただきたいと思います。ただ、残念ながら、25分には終わらないといけないという事ですので、大変すいません。3人の方に共通項とそれから、結いの松本さんに答えていただくことと、両方あります。まず共通の事については同じようでしたらパスしていただくという形でやりたいと思います。小島さんの方からまとめて、もし話していただければ、お願いします。まず一つ目はどんな人がグループリビングにどういう暮らし方を選択されてるのか、門限はあるのか、経営はどうなのか？看取りはどうなっているのか？そして最後に、入居者同士のコミュニケーションのあり方っていうのはどうなのかというその、5つになりますが、お願いします。

[小島]

はい。えーっとですね、私のところの場合はほとんど東京都ですので、7万5000円であれば安いわねというふうに言われています。やはりそれは地域の事情というのは違います。周辺のサービス付きの高齢者住宅とか見ても、似たような額を設定してあるので妥当な額だと考えています。ただしそれは、万人に適用されるとは思っていません。昨日も出た質問ですがやっぱりこれは、遺族年金をもらっている女の方が自分の年金も含めてなんとか、という額であって、全ての人というわけにはいかない。そうでない方たちについてはやっぱりいろいろ考えていく必要があるだろうと思います。それが一点ですね。もう本当に家売って入ってきてくださる方がいらっしゃるわけだから、とても責任を感じているのは

事実です。ただ、何が起きるかわからないということもあって、この14年介護保険ができてから、有料老人ホーム等たくさんできました。経営者が何回も代わっているところも見ています。それはそれで、代わるたびにいろいろな事があるみたいですが、それなりの生活は継続させているということもあって、私達のようなところではまだ考えられないですけど、あまりそのへんまで考えてしまうと、正直言って何もできない。倒産しないように頑張りますとしか言いようがないし、他の事業との兼ね合いの中で、頑張っていきたいと思えます。

で門限はありません。まったくご自由です。ただし今晚いるのかいないのか、というのはわかるようにしてあります。あと入居者同士のいさかいというかトラブルはあります。それが明らかに入居するときの契約に違反するようなことであれば、わたくしどもの方からいいます。そうではなくって、あの人がかようなんだけど、どうするみたいな話については、大人なんだから自分たちでやってくださいとはっきり申し上げます。あのね、そこまで親切にするのはよくないと思います。あのグループホームの中もそうですけど、なんかこう、なんかぐちゃぐちゃしてもね、解決能力、認知症の方でも持ってるんですよね。なんか高齢者を、大人と考えてないんじゃない？っていう質問だと思いました。大人です。私達より大人です。非常にそのへんの事は考えることもできるし、そのへんも逆に私がうばってはいけない。喧嘩する自由もあれば、いさかう自由だってあるじゃないですか。家にいたってどこにいたって、隣の人が変な人だってことがいっぱいあって高級マンションで「隣のうちがおかしなうちで困っちゃうのよ」って話を聞いてます。だから、全てのことがいいふうに暮らせるなんてことはありえないわけで、それ全部満たしてくださいって言われてもそんな事はできませんとしか申し上げられない。

看取りについては、みなさんリアルな在宅での看取りってあんまり知らないんじゃないかな？私達は訪問介護や、居宅のサービスで在宅看取りを知っています。条件の悪いところにお住まいの方が、何が何でもここで死ぬって1人ですよ、ご親族もいない方が、俺はここで死ぬって譲らなかつた方が今まで何人もいらっしゃいます。頑固な職人さんの方が多かったですね。それでは介護保険の限度額の中で、何とかしましょうと。例えば夜中「この時間誰も来ないんだけど本当にいいの？」って何回もケアマネが確認しています。「いいんだ」って本人がおっしゃいました。だから自分の問題として、どういう死を選びたいのか、いつもいろいろしてもらいたいなら施設へどうぞ、病院へどうぞ。ただ、自分のうちで死にたいというふうになったら、今の現実の中ではなかなか夜中のところまで、多少はできても完璧にできるものはない。デンマークに行って看取りについて聞いたときに数日間の事を考えていましたね。だから日本人はね、過剰に自分に対して人に対してもおせっかいだなと思いました。だからみなさん、あなたはどこで死にたいですか？っていうのをリアルに考えていただきたい。その問題をグループリングの話でも解決はつかない。「覚悟召されよ」って話であって、どう覚悟するのかと言うのは、みなさんの死生観に関わっているわけです。ですから、ここで、グループリビングえんの森で死にたいとおっしゃる方に対しては責任を持って全力でできる限りのことはしますできる限りを超えたことはしません。というところです。

[中村]

えーっと先ほどの話の中に、あの空いてるアパートがどうのこうのって話がありましたよね。そのへんの話で、これは建築屋が今後生きて行く道で、それを活路（一つの選択肢）にと言う話を先ほどしましたけど、まさにそのとおりで、その方法論をオーナーにきちんと説明して、そのまま壊してしまうような物件の再利用と言う話にしちゃうのですよ。建築屋の指導の元、その様な物件を借りて何人かでそこで住む（共生する）。これってグループリビングですよ。それでいいのじゃないのですか？でそこに足りないサービス（条件）をみんなで買おうよ、手に入れようよって、まさにグループリビング。そのへんの詳しい情報は「グループリビング運営協議会」に入っただければ豊富な情報を持っていますので。後で入会申込書をみなさんのところにお配りしますので、是非ともどうぞ！それと家賃が高い云々という方は、是非とも我が「じゅげむ館」に。ただし冬期間は寒いって話がありましたが寒さだけは我慢我慢、勘弁してください。私の個人的理由で寒いわけじゃない。後、既設建築物のイノベーションで典型的なパターンの町中居住なんていうテーマは行政がものすごく喜ぶ（興味のある）話なんですね。全国の地方都市に駅前再開発なんて、米沢市にもご多分に漏れずあると思うのですけど？ホテル等が廃業で空きっぱなしでそのままなんてところは是非とも改修・イノベーションしていただければと考えております。本当に業界にはまだまだ残されたビジネスチャンスがありますので、知人に建築屋さんがおられましたら、是非そういう話を聞いたよと話をしてみてください。よろしく申し上げます。

[松本]

家を処分してはいられている方が1名いらっしゃいます。もう1名の方も処分ではないですが、家を貸してということで入られてますので、実際に二人に聞いていただくのが一番いいかなと思います。そのほかの方は、ご家族がいらっしゃるというか娘息子さんがいらっしゃるって、なおかつ様々な事情でおはிரりいただいているというのが現状ですので、今まで6年間やってきて施設入居で転居なさった方以外で出て行った方は1人だけです。なので折り合いが悪くなったかどうかという問題は、小島さんがおっしゃったようなことで、多分なんとか折り合いをつけていらっしゃるんだと思います。今日は4人の方参加されているようなので、あんまりぶっちゃけ話をすると後で私怒られそうなので、あんまり言えないんですけど、折り合いつけていらっしゃるんだと思います。いろいろ聞かされますよね。でも私いい加減なので、あーそうふんふんふんふんって言って忘れるように努力しています。そんな感じですかね。あとは看取りの事なんですけど、グループリビングで看取りをさせていただいた方はどなたもまだいらっしゃらないので、経験がないのでなんとも言えないです。ただ訪問看護とか訪問介護を入れれば、なんとかなるよっていう小島さんのあの～、これからは小島さんを師匠にしてお勉強させていただきたいと思います。

[上野]

松本さん、結いのきのことで、入居の優先基準はどう決められているのかと。それから食事の時、人々が非常に和気あいあいとされていたが、どういう運営をしたらあんなに暖かく迎えていただけるのだろうか、という質問が残っています。

[松本]

今日は特別とびっきりのいい顔をしていただいたんじゃないかなと思います。入居の優先順位は申し込み順です。グループホームほど、お申し込みはありませんので、空いたら即入っていただきたいというのが現状です。ただやっぱり運営する側はお金を払っていただけかどうかというのがありますので、この金額ですがどうでしょうかというふうにお話して、大丈夫ですってことであればもちろんお入りいただく。それ以外の事は、先ほど申し上げましたけど、いろんな方がいらっしゃるの、いろんな折り合いをそれぞれがつけて、ご入居を続けていただいているんだと思います。ちなみに1人だけおうちに帰れた方は、1ヶ月後くらいに亡くなられてしまいました。ご入居を続けていただいていたなら、もしかしたらご存命だったかと思うと、ちょっと悔しい思いがします。

[上野]

ありがとうございます。あと一つ、ご意見がありました。中間層の人々のグループリビングというのはそういうことになっていて、それより非常に厳しい、年金の方だとか、そういう方がグループリビングに入ることが難しいという問題をご指摘いただいていた。これに対して、私の経験をお話することが、お答えになっているかどうか分からないので、私は1993年に北欧に在外研究で滞在し、北欧でグループリビングと同じような住宅の状況を見てまいりました。その時にわかったことは、日本と圧倒的に違うのが、家賃補助制度をきちんと国が持っているということです。それからもう一つ、こういうふうに必要な人が助け合いながら、こういう住宅づくりをやるならば、結果的には医療費、それから福祉の費用、そして消防署、警察署、そういったものにかかる費用が結果的にはトータルで見ると安くなる。そして、どちらが、人々にとって幸せなのかを考えさせられました。どんなに介護保険や看護制度が整備されていても、寂しさというのを誰も見てくれるわけにはいかないと。また、自分がケアマネなどの専門家や他人からここに行きなさいと言われる前に、自分自身が自分と一緒にいるお友達と選んで一緒に入りたい、そういったような背景の中で出てきた住宅づくりだったというのがわかりました。そういうことを踏まえると、今日見られたグループリビングは非常によいところがあるんですけど、それを進めていくためには、社会制度にも目を向けながら進めていかなければならないと研究者の一人としては思っております。

最後に、実行委員長の大江先生に残りの質問と今日の皆様の議論を聞いていただいたことについてまとめをお願いします。

[大江（慶應義塾大学）]

上野先生からシェアハウスとグループリビングについての違いについて答える役割が回ってきました。私はシェアハウスがそんなに広がると思ってなかったのですが、もちろん脱法ハウスのような粗悪なものは論外として、テレビドラマなどでシェアハウスいいねって場面がたくさんあったり、新書版で「他人と暮らす若者たち」という本が出たりとか、シェアハウスがだんだんひろがっているという風には感じています。グループリビングとどう違うのかということですが、少なくともCOCO湘南台型のモデルのグループリビングは、美味しく栄養バランスのよいものを皆で食べることを基本にしているので、そういうサー

ビスが不可欠であるのに対し、シェアハウスというのは、そういうサービスを前提をしないものだと思います。たまたま出会った人々が、緩い共同性の中で、何かを一緒にやりたりやらなかったりするという選択の幅が非常に広いものなんじゃないかというふうに現段階では思っているところです。

【上野】

先生もう一つ、最後のまとめをおねがいします。

【大江】

最後はあと 2 分ぐらいでまとめるとのことなんですが、実は今日のここでのテーマは「生協とグループリビング」というものを掲げてあったんです。なぜかという、米沢では生協の活動をベースにして、それが発展していくなかでグループリビングという取り組みがあったと理解しており、今後こうしたタイプのグループリビングが出てくるのではないかと考えたからです。神奈川の生協の人たちと話をしていると、やはりグループリビングやりたいという生協の人たち結構いるんですね。

今日のみなさんのテーブルのお話を伺っていても、「無理やり動員がかかったからきました」とおっしゃっていますが、要するにとっても親密感がある中での発言が結構多かったと思うのです。それはやはり、生協の活動でつながっているということがベースにあるからなんだなと思いました。そういうベースの共同性があるかどうかということがグループリビングを安定的に運営していくってことにはかなりつながっているのではないかと思います。小島さんのところも、長い時間かけて、地域の中に信頼のネットワークを作ってきたということですし、そうした信頼感の中で、グループリビング運営というものが選択できる対象になっているんだと思うんですね。そのベースの信頼関係っていうのを、地域の中のいろんな層があると思うんですけど、レイヤーというのでしょうか、生協活動っていうレイヤーの中でできているということが、やっぱりすごく大事なことだと思います。

これからグループリビングをつくる、あるいは既存の建物改修して始めるときに、ハードウェアはなんとかなるかもしれませんが、そこでどういう生活が行われるかというに関して、それを支えるネットワークとサービスの供給を同時に生み出すには、地域の事業者があって初めて成立するのかなというふうに思いました。今日はそういう意味で、やっぱり生協活動や、それに類する地域の中に張り巡らされているベースの共同性というものの大切さをあらためて教えていただいたと思います。是非みなさんそういうものから、グループリビングに限らず、いろんなものが生み出されると思うので、そういう新しいものを生み出していくということにこれからも楽しく取り組んでいただければいいかなと思いました。ということでまとめとさせていただきます。どうもありがとうございました。